

訂改
女子新國文
卷三

375.9
Ha7
資料室



42232

教科書文庫

4
810
42-1927
200030 1905

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

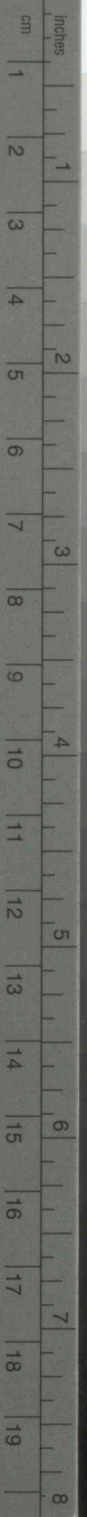


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

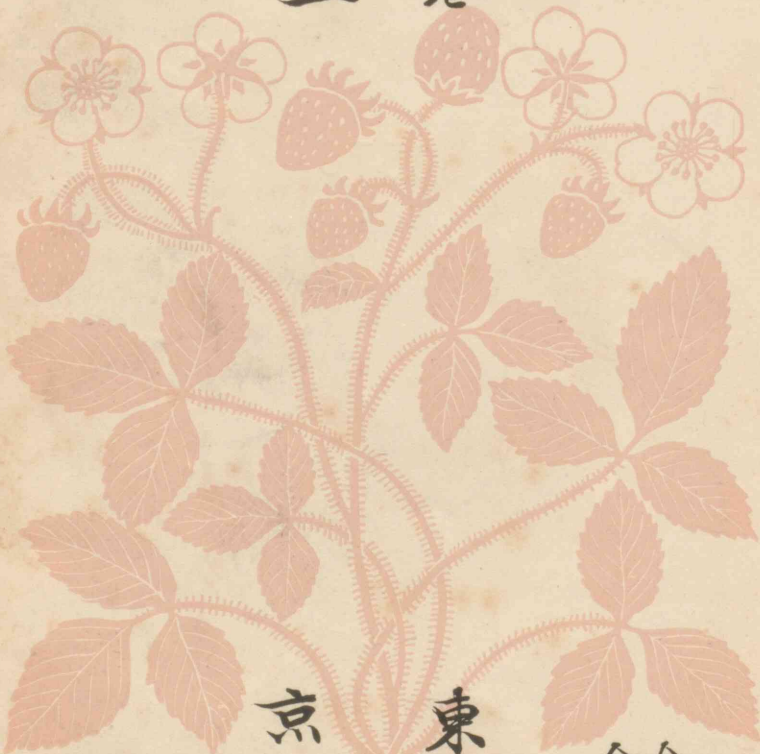
375.9
Ha7

日二十月一年二和昭 濟定檢省部文
用科語國校學女等高

編一矢賀芳 士博學女

文國新子女 改訂

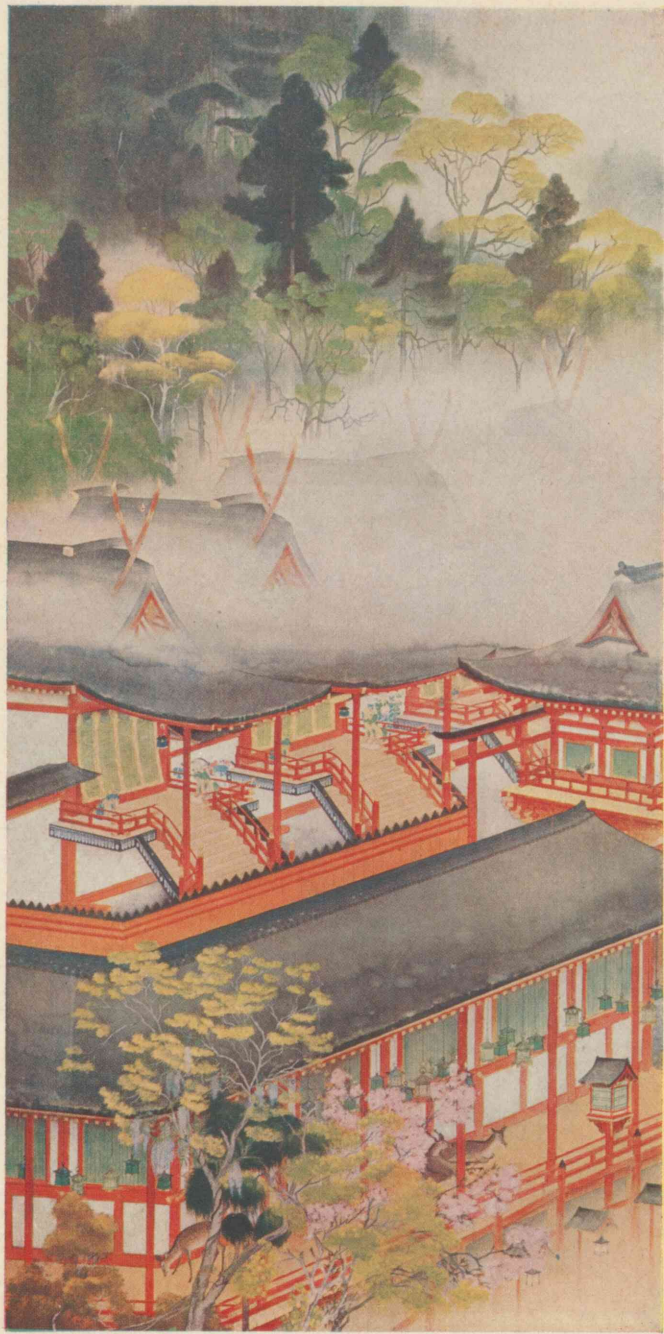
三卷



京東
先發房山富 會合資社

Faint, ghostly impressions of the book's title and author information, including '女子新國文' and '芳賀矢一編'.





神苑春雨

山口蓬春筆

三
奈
良



訂改

女子新國文 卷三 目次

一 皇太后陛下……………野尻精一……………一

二 御下賜御歌に就きて(自修文)……………(高等小學讀本)……………八

三 奈 良……………拾……………一〇

四 貝 拾……………野上彌生子……………二

五 春來る……………つばくら……………加藤まさきを……………一四

六 觀心寺……………近松秋江……………一五

七 楠木正行の母(自修文)……………下田歌子……………二三

八 同 情…………………………二五

九 讃岐より……………有本芳水……………三〇

一〇 青葉する頃……………相馬御風……………三四

目次

一 峰の雪……………西條八十…四〇

二 趣味の嚴島……………五十嵐力…四〇

三 バリだより(自修文)……………吉江喬松…四五

三 松と大和心……………池邊義象…五三

四 歌話……………中村秋香…五九

一 とりゐ坂……………五九

二 あがたの宿……………六〇

三 焼野の原……………六一

五 大河……………白鳥省吾…六三

六 神社……………(高等小學讀本)…六四

七 鏡……………(高等小學讀本)…六九

八 佛閣……………七二

九 芭蕉の花……………吉村冬彦…七七

一〇 女の名附變體假名(自修文)……………七九

一一 田園雜興……………大町桂月…八二

一二 朝の頌歌……………川路柳虹…八六

一三 板倉勝重……………新井白石…八九

一四 富士の大觀……………大町桂月…九四

山のあなた……………北原白秋…一〇一

一五 芙蓉(自修文)……………高瀨虚子…一〇二

一六 浮花……………五十嵐力…一〇五

一七 郊外所見……………竹友藻風…一〇九

一 鳥……………一〇九

二 蟲……………一〇九

一八 桃山御陵……………田山花袋…一一二

一九 ゆかしの杉(自修文)……………幣原坦…一二五

三 秋の風物二三……………中村武羅夫…二三
 三 佛の化身……………相馬御風…二三〇
 三 揚子江の秋その一……………南部修太郎…二三六
 三 揚子江の秋その二……………南部修太郎…二三四
 三 草雲雀(自修文)……………薄田泣菫…二四〇
 三 漢土雑話……………(高等小學讀本)…二五
 三 花のをとめ……………下田惟直…二六一
 三 鳥類の生活……………松本亦太郎…二六九
 三 本居翁の遺蹟その一……………一七
 三 本居翁の遺蹟その二……………一七

改訂 女子新國文 卷三

一 皇太后陛下

(一)御名は節子。

(一) 皇太后陛下は九條道孝公の第四女にましまし、明治十七年六月二十五日御降誕、明治三十三年五月十日皇太子妃に立たせ給ひ、大正元年七月先帝御踐祚ましまししかば、やがて皇后の位にゐさせ給ひぬ。幼き時より學業にいそしみ給ひ、萬づの徳高くおはすが中にも、上なく貴き御身を以て、下萬民をあはれませ給ふ御いつくしみの深きは、東西古今の

天
乾
地
坤

坤德

勸業獎學



皇太后陛下

賢后にもその類あるべしとも覺えず。

御坤德のかずかずかけて申さんも憚あれど、何事も昭憲皇太后の御遺志をつぎ給ひて、老いたるもの、貧しきものを恵み給ひ、勸業獎學の御趣旨を示し給へる御孝心は、全國國民の齊しく仰ぎ奉るところなり。いつはあれどもこたびの關東大震災に、避難民

(1) Barrack

(2) 明治八年十一月二十九日

のバラックをさへ見まはせ給へる、いといと畏し。

昭憲皇太后は去んぬる明治八年東京女子師範學校に行啓あらせられしが、その翌九年二月、

みがかずば玉も鏡もなにかせん

まなびの道もかくこそありけれ

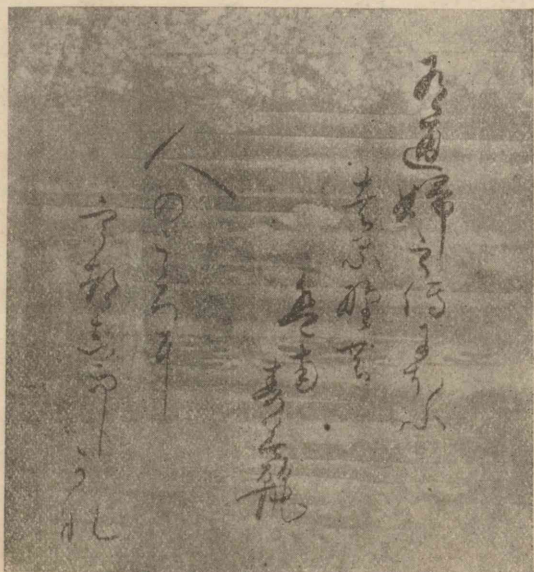
(1) 今の女子學習院の前身。

うつつして
にほふはる
野のはなす
みれ人のこ
ころにうつ
してしかな

(2) 明治四十二年設立。

(3) 大正五年四月四日。

といふ御歌を賜ひ、また華族女學校を建てさせ給ひて、「金剛石」「水は器」の御歌を賜ひて、偏へに女子の教育を御獎勵あらせられき。奈良の女子高等師範學校は、設立日なほ淺きこととて、未だ皇太后宮の行啓の恩榮を擔ふことなかりしに、大正五年四月



皇太后陛下御筆蹟

駕を枉げる

(一)大正六年一月十六日

(二)奈良市の東にある

をしへ草

(三)奈良縣添上郡

うちはへて

始めてここに駕を枉げさせられ、親しく授業をみそなはして、後

春日の山にいづる日の

曇らぬ光仰ぎつゝ、

かざせや心の花ざくら、

つめよ誠のをしへ草。

源きよき佐保河の

汀の柳うちはへて、

古きをたづね、新しき

道に進めやひと筋に。

の御歌を下し賜ひぬ。同校の面目はいふにおよばず、全国の

ロヤリにカクケカクこのころ
と休ませつゝおめでたき身な
あり寛分心の柳、花を笑ひて
又修養せよ

感涙をしぼる

(一)新勅撰集の歌よみ人知らず

(二)教育家。當時の奈良女子高等師範学校長。長くもおそれおほく

(三)奈良女子高等師範学校

民皆大御心の有難きに感涙をしぼらぬはなかりき。その後陛下は東京、福岡、京都の各帝國大學にも行啓あり、東京高等工業学校をもみそなはしつ。これ皆學問御奨励の思召に出でたるはいふまでもなし。わが日の本の國に生まれ、今の大御代にあひて、引きつゞき二代の賢后の御いつくしみを受くる我等の幸福は、譬へんにものなしといふべし。

うれしさを昔は袖につゝみけり

こよひは身にも餘りぬるかな

の古歌さへ思ひ出でられてなん。

自修文

二 御下賜御歌に就きて

野尻精一

皇太后陛下、大正五年四月四日畏くも當校^(三)に行啓あらせられ、

辱くも
ありがたくも
もつたいなく

感化
うごまを、改く

惟る
かんがへる。

風物
景色。ありき

いともありが
たき
甚だありがた

鞏固
かたい。

教學の指針
學問を教へる
上の手びき

副ふ
かなふ。

含めさせ給へ
る
おふくませに
なつた。

親しく生徒の學業をみそなはせられ、越えて六年一月十六日、更に辱くも御歌を下し賜はりて、貴き御教訓を垂れさせ給ひぬ當校の光榮何に喩へんやうもなく、職員生徒一同感激已む能はざるなり。

謹みて惟るに、この御歌は奈良の名所風物に寄せて、女子の學徳修養に關する御教訓の御趣旨を詠出でさせ給へるいと有難き御詠なれば、朝に春日の山に出づる日を仰ぎ、夕べに佐保の河原にせ、らぐ流を聞きつゝ、學業を當校に修むる女子にありては、これを誦し奉る毎に、おのづから深厚なる感化を受け、鞏固なる信念を養ふを得べきなり。されば當校にては、永くこれを教學の指針と仰ぎて、その御趣旨に副ひ奉らんことに勉むべく、また謹んで樂譜を作製し、校歌としてこれを奉唱すべし。されど御歌に含めさせ給へる御教訓に至りては、常に當校生徒のみならず、

奉戴す
あがめたい

奉唱
お歌ひまうす

めでたかるべ
し
けつこうなこ
とである

按ず
かんがへる。

肇國以來
日本の國が始
めて開けてこ
のかた。

拜察せらる
お察し申す。

懿旨
おかんがへ。

ず、學事にいそしむ本邦女子の遍く奉戴すべきものにして、いづれの學校にて奉唱せんもめでたかるべし。

御歌にこもれる大御心のほどは、たやすく窺ひ奉るべきにあらねど、今謹みてその大意を按じ奉るに、第一節に於ては、肇國以來とこしへに榮え行く皇統の大御光を仰ぎつゝ、花櫻の如く、また若草の如く、美しく清く優しきまことの日本婦人たるやう修養せよとの思召を詠出でさせられ、第二節に於ては、源流清きわが國古來の道をたづね守り、今の世の新しき事物に應じて履みゆくべき道を、柳の絲のうちにはたるやう、いついまでもひとすぢに進めとの思召を詠み給へることと拜察せらる。されど願ふに、右は大御心の一端を窺ひ奉り得たるに過ぎざるべく、反復拜誦するに隨ひ、懿旨の甚だ深遠なるを思ひ、無量の感を覺ゆると共に、誠に恐懼に堪へざるなり。

三 奈良

(一)奈良東大寺の東。手向山ともいふ。

色に咲く

(二)芭蕉の句。

(三)東大寺の中堂。聖武天皇の建立。
(四)聖武天皇の御物などを藏める。
(五)聖武天皇の御代。

若草山も春日野も、

かすみこめたる春景色。

ふるき都の名残とて

花は昔の色に咲く。

古人いへらく、奈良七重

七堂伽藍八重櫻。

二

大佛殿に佛燈の

光は今もかゞやきて、

正倉院は天平の

音を固く封じたり。

古人いへらく、蟲干や

甥の僧訪ふ東大寺。

三

鹿の鳴く音に誘はれて

三笠の山を離れけん、

満月はやく猿澤の

池の水の面にうかびたり。

古人いへらく、仲磨の

魂祭せんけふの月。

四

佐保の川原は水あせて、

石にさゝやく音しづか。



堂 中 の 寺 大 東



(筆己克宅三) 野 日 春

(一)蕪村の句。

(二)奈良市の東方。

(三)奈良市内の名所。

(四)蕪村の句。仲磨とは安倍仲磨のこと。

(一) 奈良縣葛城郡
長市の西南方
に當る

(二) 几童の句

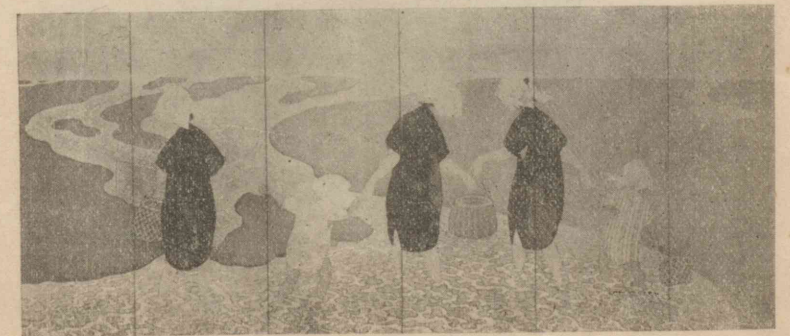
(三) 蕪村の句

かへりみすれば葛城の
山のいたゞき雪白し。
古人いへらく大佛を

見かけて速き冬野かな。
高等小學讀本

四 貝拾

春の海ひねもすのたりのたりかな。
春風にしわむ小波の色は濱松の緑
に續き、濱松の緑は更に野山の緑に續
きて、水陸一色、春の色は青くして若や
かなり。



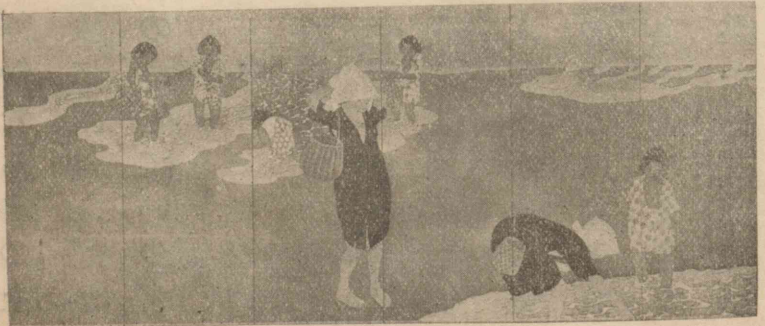
一のそ (筆香華路都) 拾 貝

嬉々

花ぐはし
ぬば玉

むくつけさ

赤色の襷をかけ、桃色の裙裏か、げ
て、嬉々とうち群れて磯邊に貝拾ふ少
女子は、げに春の子なり。拾へる貝は何
ぞ。花ぐはし櫻貝もあるべく、ぬば玉
の烏貝もあるべし。紫貝、錦貝、鎧貝など、
その名いづれもうるはしからぬはな
し。蠟燭貝、子安貝など形いとめでたし。
きしやごを取集めてはおはじきの料
とするなるべく、寄居蟲を取上げては、
むくつけさに驚き棄つるも興あり。
父母のいつくしみに人となり、日に



二のそ (筆香華路都) 拾 貝

浪 うき世の荒

陰氣

魅力

月に學の園に遊べる實に春の海の如く靜かなる身の上ならずや。日に日に教草摘上ぐるは、潮干の濱に貝拾ふ穩かさにも似たり。あはれ少女等よ、のどけき春の心もて、いつまでもうき世の荒浪は知らであらなん。

五 春來る

野上彌生子

春が來ました。雪や、みぞれや、霜や、灰色の雲や、陰氣なもの、わびしいものは悉くその存在を失つて、人間は頭上の青い大きな圓い窓を、いつも故障なく仰ぎ得るやうになりました。そこから冬とは勿論、夏の暑過ぎたり、冬の冷え過ぎたりする光線とは全く違つた、一種特別な柔かい甘美な魅力

物象

兇暴

に充ちたものが降つて來ました。世界に生を得てゐるすべての物象中、かゝる自然的變化については、人間よりも何よりも鋭敏な神經を有してゐる樹木は、いち早くそれを見ようとして、細長い青い目を開きました。花もその赤い唇を用意しました。土の肌は肥えふとり、河は水量を増して、勇ましい男性的の聲をあげて、春の歡を歌ふ第一聲となりました。山にも、海にも、森にも、畑にも、黒い煤煙の渦卷く都市の上にも、もう著しい變化の起つたことは明らかでありました。山脈の皺は花で飾られてゐました。波も二三個月前の兇暴なうなりを靜めて、蛇使の手にかゝつた巨蛇のやうに、のつたりと沿岸の岩や岬に戯れてゐました。しんしんと雪に降り

(虎杖) 神聖な土の祭壇

緊張

つばくらら

行路樹

うづめられてゐた森は、茅花取やいたどり取の子供の叫を以て充たされ、百姓は爐邊を離れて、彼等の神聖な土の祭壇に立ちました。麥は順當な發育を遂げて、彼等の現れるのを待つてゐました。畑を打ち、種を蒔く、肥料をやる、秋の收穫のすべての準備、忙しい仕事に緊張した心は、黒く強いその腕に二倍の力を與へました。大きな黄金色の太陽の直下に、彼等は研ぎすました鋤を高くあげました。その頃には、都市に出てゐる彼等の子供や孫が、學校の窓から、商家の店先から、または工場の二階から故郷の春を思ひながら、柳、篠懸、銀杏、櫻の行路樹を眺めてゐるのであります。

つばくらら

加藤まささを

をやみ
ことばらくやむ

燕尾の云々
燕尾服を着た
すがた。

(一)大阪府南河内
郡柏原町。大
和川の上流。
(二)南河内郡長野
村。柏原の南
約五里。

とほい南のお國から、

着いたばかりのつばくらら、

あいさつ廻りをすまきうと、

黒い燕尾のいきすがた。

旅のやつれが見えてはと、

雨のをやみの横丁で、

ちよいと出かけに、水鏡、

うつしてついと飛んで行た。

六 觀心寺

近松 秋江

大正九年の四月十八日であつたと思ふ。私はその時分京都に住んでゐた。京都の春にもちよつと飽いてゐたから、どこか河内の方の春をたづねて見たいと思つて、その日汽車で奈良の方を廻つて、關西線の柏原から南河内の長野の方へ行く輕便鐵道に乗換へて、その晩は長野に着いて泊つた。

菩提寺
(一)南河内郡川上村大字寺元に在る。
(二)南河内郡天野村大字下里。眞言宗。寺中に行宮址がある。

(三)Model

楠公の菩提寺である河内の觀心寺へ行つて見たいと思つたのである。それから天野の金剛寺へも行つて見たいと考へた。奈良から大阪の方へ向かふ大和川の小さい溪谷を通過する頃、そこの松の木山のところどころに、山を切開いて桃を作つてゐる所がある。その桃がもう大分盛は過ぎてゐるが、まだ淡紅色の花を残してゐるのが、赤松の幹の間に美しく見えてゐる。それがいかにも土佐派の繪によく似てゐる。土佐繪などといふものは、寫實ではないやうに思はれてゐるが、やつぱり藝術の起源は現實を模倣してゐるといふ原則に反してゐない。大和地方は土佐繪のモデルになるによい所だなどと思ひながら行つた。

點滴

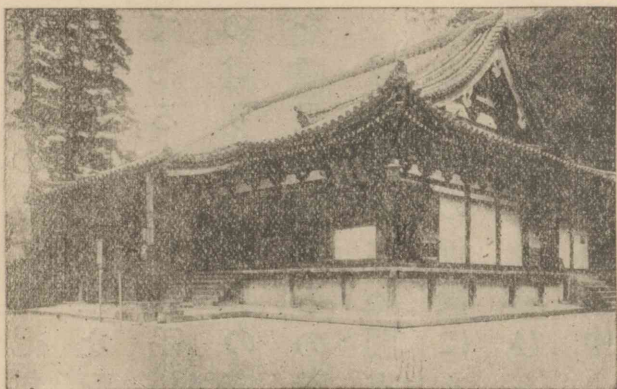
翌朝目を覺すと、ものうい點滴の音がして、春雨が降つてゐた。私はそれで非常な不幸を感じた。春雨は悪いものではないが、かうしてせつかく一日二日の外出を目的とする小旅行に出てゐるのに、雨に降られるといふのは、なんといふ悪い日に出會つたことであらうと、心の中でかこつた。まよ、どうしても雨がやまなければ、これからすぐ京都に引返すまでのことだとあきらめながら、朝飯を食べてゐると、明るい春雨は間もなく小降りになつて、軒の點滴の音も靜かになり、空には白い雨雲が旭の輝きと共に刻々に霧散して、その切目から碧空が顯れて來た。私の氣分は俄に軽く楽しく、幸福の感に満ちて來た。曉方の春雨の一降り、そこの

草木の色が艶を帯びて輝き、向ふの山の際に立つてゐる一本の山櫻が、眞白に旭に匂うてゐる。

(一)河内國。大和との境にそびえる。

観心寺への道は金剛山に登る道である。行くに随つて、両方から小さい山と山との間の田圃が次第に狭まり、向ふの松の木山の尾根には、淡紅な若葉を吹いた山櫻が靜かに咲いてゐる。籬段のやうに次第上りにどこまでも高い方へ重つて行つてゐる麥畑のところには、菜種の花が黄色く咲いてゐる。青い麥の葉と、黄色い菜の花と、山際の爽やかな朝の空氣と、いかにも春らしい匂が一面に満ちてゐる。春の日は遅々として輝き、往來の人三五人。向ふから博勞^{ハクラウ}が牛を

牽いて來た。黄色い蝶々がその牛の背に睦れつゝ、一緒に翔つてゐる。



點綴

籬落

ある。眞青な麥畑の野が遠く傾斜して續き、人家の籬落^{かき}がそ

観
心
寺
道を、いつとはなしに次第に高みに上つて來た。そして、麥畑と雜木林と心を點綴した間の道を、右に折れ左に折れてなほ少時行き、一つの切通を向ふに通らぬけると、前面に俄に深い溪谷が開展してゐるのが、脚下に見おろされた。なかなか大きな溪で

眉を壓す

の間に點綴してゐる。薄いもやが一面に立ちこめて、そのま
た向ふ方には、紀伊と河内との境上を東西に走つてゐる
紀伊見峠の優雅な形をした山脉が、眉を壓するやうに聳え
てゐる。左方の繩手道に續く溪の奥を見ると、深い山と山と
の重り合つた奥の方に、金剛山の峻峰がまさしくその一角
を隠見してゐるのも心をそゝる。

私は山の多い關東と違ひ、山を見る點では殆どばかにし
てゐたこの近畿にあつて、こんな山岳のふるまひにあづか
つたのは、全く思ひもかけぬ御馳走になつたやうな氣がし
た。私は繩手道の中央に突つ立ち、したゝか春光を浴びなが
ら、願望低徊去る能はざるものがあつた。脚の下からすぐ可

願望低徊

しがやまな
は、きここ
は、きここ
は、きここ

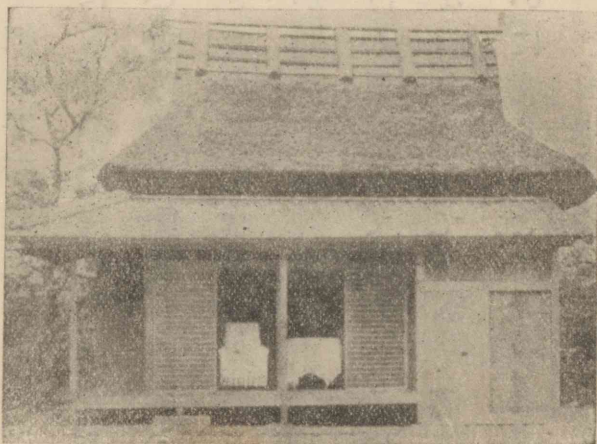
清純
涵養

なりな急傾斜をなして、向ふの溪底に陥没して行つてゐる
麥畑の野面には、ここにはまた菜の花が、あちらにも、こちら
にも、黄金の席をのべたやうに咲盛り、そのまた下の方のひ
とむら濃く繁茂した森の蔭には、水車小屋が立つてゐて、大
きな大きな水車の廻轉してゐるのが見える。それに春の日
が麗かに照輝いて、車の廻轉するにつれて、きらきらと水が
白く反射してゐる。なるほど楠氏三代の誠忠は、こんな清純
な山中に於て始めて涵養されたのだなと、私はひとりで大
いに肯くところがあつた。

それ以來春になる毎に、もう一遍行つて見たいと思ふ所
は、その河内の觀心寺の溪である。

自修文

期す
かくごする。



楠公夫人遺蹟楠妣庵

七 楠木正行の母

下田歌子

て、氣絶せんばかりに悼み悲しみました。

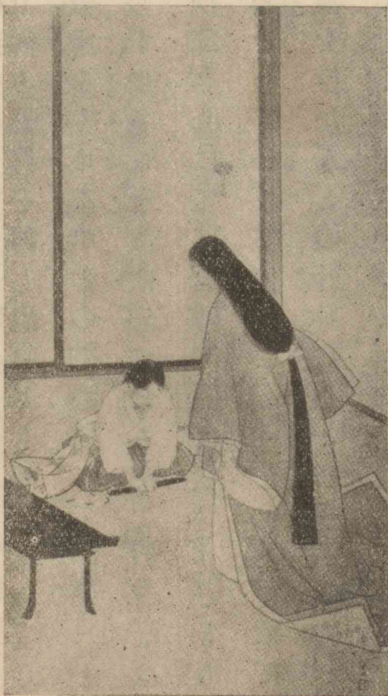
敵足利尊氏は楠木正成の首を河内の國なる正行の許へ送り届けました。かねて期したことがながらも、一門の悲歎は譬へるにもものもありません。夫人は氣丈な人でありましたが、さすが亡き夫の變りはてた面影を見ては、胸も張裂けんばかりの歎であります。一子正行は、賢いとはいへ僅かに十一歳、これも父の首を見

持佛堂
佛壇のある室。

諸肌
両方の肌。

ものや狂ひ
し正行
氣がちがつた
か正行

少時茫然として居りました正行は、つと身を起して、持佛堂に走り入りました。その様子を怪しと見た母夫人は、直ちにその後を追うて、そつとも蔭から窺つて居りました。かくとも知らぬ正行は、諸肌脱いで靈前に向かひ、父が記念として賜はつた短刀を抜放つて、直ちに腹に突立てようといたしました。あなやと驚いた母夫人は走り寄つて、正行の小腕に取りすがり、ものや狂ひし正行。父君が汝を還し給ひしは、げふここに空しく腹切らせんとての爲にてはあるまじ。また徒に生存へて父の後を弔へよと



楠公母子(古瀬繁平筆)

七 楠木正行の母(自修文)

跋扈 わがまゝにし
たいことをす
る
勢に附く云々 勢のよい方に
つき、権力の
ある方にこび
る
父正成ここに (一)父正成ここ
に於て賊軍を苦
しめた。
義旗を翻す 義旗を翻す
朝廷の爲に兵
を起す。
恩顧のもの 恩顧のものを
目をかけて置
いてやつたも
の。
いひがひなし いひがひなし
いふほどの價
値もない。い
くぢがない。
奸計 奸計
わるだくみ。
理の當然 理の當然
もつともな道
理。
一心不亂 一心不亂
そのことばか
りに一心にな
ること。

のことにてもあるまじ。父君在さずならん後には、必ず朝敵尊氏
跋扈して、君を苦しめ奉らん。天下皆勢に付き權に媚び、君の御爲
に身を捧げ命を捨つるものは幾人かあるべき。若し然あらん時
には、金剛山の城に立籠り、義旗を翻し、恩顧のものを集め、有らん
限りの力を竭して、叡慮を安め奉れとの御遺言にて候ひき。』と、汝
は母に傳へしにあらずや。さるを汝は忘れたるか。この有様は何
事ぞ。かくもいひがひなき心にては、君の御用に立つべくもあら
ず。尊氏が父君の御首をわざわざこの地に送りしは、情に似て情
にあらず、身方の鋭氣を挫かんと、の奸計なりと知らざるか。』と、か
つ泣きかつ勵まして、漸く刃を取上げました。

正行も理の當然に責められて、今更にわが身の無謀を後悔し、
これよりはたゞ一心不亂に朝敵追討の工夫を凝らし、苟且の遊
戯にも、朝敵退治の眞似ばかりいたしました。この間、母夫人の苦

殘餘の郎黨 殘餘の郎黨
生きのこつた
けらい。多く
は正成に從つ
て討死したの
ていふ。
躍然として 躍然として
いきいきとし
て。
生動 生動
いきいきとし
てうごくこと。
臨濟宗。今は (一)臨濟宗。今は
圓覺寺に屬す
る。
中興の祖 中興の祖
(二)北條氏第六代
の執權。
同第七代の執 (三)同第七代の執
權。
北條貞時。 (四)北條貞時。

心はいかほどでありましたらう。僅か十歳に餘つたばかりのわ
が子を守立てて、天下の敵を引受ける覺悟を以て、殘餘の郎黨を
撫でなつけました。この氣丈な性行は、躍然として今なほ眼の前
に生動する心地がいたすのであります。 — 日本(一)の女性 —

弱者たる女子に同情した著しい例は、鎌倉松が岡の東慶(二)
禪寺に於て見ることが出来る。寺はもと僧寺であつたのを、
頼朝の叔母が尼となつてここに住し、それから尼寺となつ
た。中興の祖は北條時宗(三)の夫人で、即ち北條貞時の母である。
覺山といふのがこの人で、
鎌倉殿へ覺山願ひ候は、出家の身ながら女のことにて候

八 同情

天聽

虐待

本願

へば、利益の種もござなく、それにつき、女と申すものは、不法の夫にも身を任せ候こと、尋常に候へども、女は狭き心にては、ふと邪の思立にて、自殺などいたし候もの、これあることに候間、三箇年のうち當寺に相抱へ、何卒縁切り候うて身輕に成候。寺法相願ひ候由。これに依り貞時より天聽を經られ、その意に任せられ候。

と寺記にある通り、夫に虐待された婦人を救はうといふのが本願である。それより五世の用堂尊尼は後醍醐天皇の女、第二十世の天秀禪尼は豊臣秀頼の女で、即ち徳川秀忠の孫であつた。この寺は男子禁制で、女が逃げてここへはいれば、なんともしることができない。つまり弱者たる女子を保護

(不埒) 弊害

川柳

(一)和歌山縣海草郡加太村(古名淡島)に古祭として踏祈る所神

するといふ目的で成立つて居つたのである。夫と不和になつて直ちにこの寺へ逃げこんで、二三年たつて、また他へ縁附くといふやうな、ふらちなものの隠場所となつた悪例もないではないが、これは一面の弊害で、止むを得ない。頼りのない女人の爲にかういふ寺のあつたといふことが、いかにもおもしろく思はれるのである。

くやしくば尋ね来て見よ松が岡

など川柳に歌つたのは、即ちこの寺である。

女子には特に同情が大切である。雛祭には人形をいたはる意味もある。二月八日及び十二月八日の両日には、女子の針供養といふことをする。針の折れたのを集めて、淡島の社

(一)下總の俳人長翠の句。

へ納め、一日絲針の業を休むのである。裁縫の業は女子の平生の仕事であるから、毎日毎日使用した針に對して、感謝の意を表する心持だらうと思ふ。かういふ無生物に對しての供養は、誠に優しい心掛である。

如月(きさらぎ)や若き心の針供養

(箒)

正月の元日にははうきを使はぬ。一年中一日として休まないから、この日だけは休ませるといふのも、はうきに對しての同情である。この心を以て、召使や奉公人に對しなればならぬ。またこれは無生物ではないが、二月初午の日、摩耶(まゝ)參に馬を引いて參詣して、飼馬の無難を祈るといふのも、優しい風習と思ふ。

(一)兵庫縣武庫郡白畑原の山上にある。

札所廻り 六十六部

淨瑠璃

野山に行暮れる

観音の三十三番の札所廻り、六十六部のうち連れて行くのは、なんとなく哀な詩的を感じを起させるものである。これは淨瑠璃のお鶴(お)よりの聯想からではなくして、淨瑠璃がこれを材料にしたのが、即ち人々のこの感情を利用したのである。御詠歌の哀な調子につれて、野山に行暮れて旅するのは、人の情を頼りとするのである。これ等の人々の境遇には、いろいろ哀な物語が疊



(筆葉玉原栗) 鶴 お

これは淨瑠璃のお鶴(お)よりの聯想からではなくして、淨瑠璃がこれを材料にしたのが、即

そこばく
報謝

(貫)

順禮

現金な世の
中

まれて居るかと思へば、そこばくの報謝を與へるのも、決して惜しくはない。田舎を旅行して、ところどころの門戸に、十年間諸事儉約のものもらひ入事無用。などと張出してあるのを見ると、なんとなく厭な感じを起す。諸事儉約は元より結構である。しかし、人の情にすがつて旅する哀な順禮者などに向かつて、些細な報謝が施されないであらうか。儉約してといふ聲の下に、慈善といふ同情の心が塞がれてしまふのは、餘りに現金な世の中と思ふ。謡曲の足利時代のやうに、行暮れた旅僧に一夜の宿を借すといふ接待までではなくとも、せめて哀な物乞に少々なにかの志を出すくらゐな情は、あつてもよいではあるまいか。さても昔むかしの世の懐かしさよ。

九 讃岐より

有本芳水

千石船に帆をあげて、
春日うらうら島めぐり、
海は霞にうすぐもり、
さくら鯛うく波の上。

うす紫の島のはて、
潮風さつと鳴るまゝに、
龍の宮居のあらはれて、
浦島の子もかへるらん。

大島、小島、はなれ島、

龍の宮居

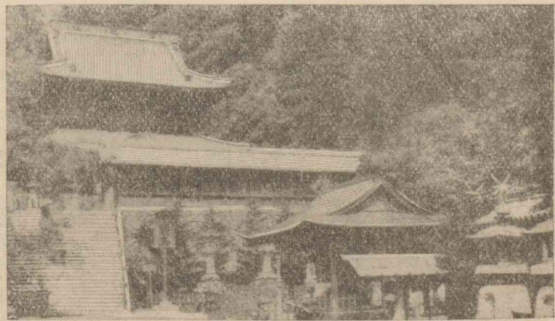
めぐし

(一)香川縣仲多度郡。
(二)國幣中社金刀比羅宮。香川縣琴平町に在る。

遍路

磯にまろころもべるうるはしき
小さき石のいろどりに、
夢もめぐしや春の旅。

船は着きたり讃岐路へ。
(一)多度津は歌によきところ、
(二)金比羅まゐりの人々に、
遍路の人もまじるかな。
寺をめぐりてかへりくる
順禮の子のおひするは、
ふた親のあるあかね染、
ひらりと風にひるがへる。

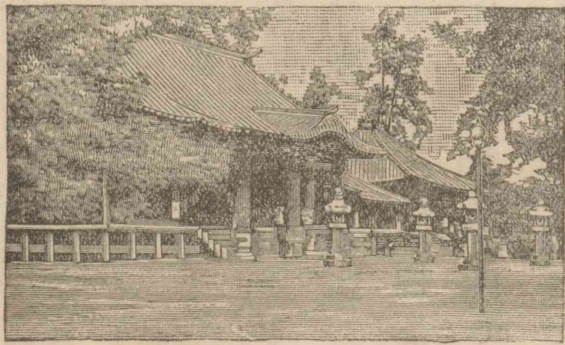


金刀比羅宮

(一)志度寺。香川縣志度町にある。眞言宗。

名だたる
歌まくら

はるばる阿波にかへるてふ
若き女の藍賣は、
ひかりまばゆく落つる日を、
のぞみて涙ながしたり。
鳥もむなしくなりぬれば、
詰(一)づる人もまれまれに、
志度の御寺に花散りて、
老いにけるかなこの春も。
きざはしたかき金比羅や、
ここは名だたる歌まくら、



志度寺

青葉がくれにちらちらと、
櫻の散るもあはれなり。

宮の欄間に飛びて啼く

鶯の音のさびしさよ。

あゝ行く春の悲しさを、

われももろともうたひ見ん。

—旅人—

一〇 青葉する頃

相馬 御風

誰やらの句に、櫻の花が散つて葉がこんもりとしてくる
と、今までなんとなく騒ぎ廻つてゐた小鳥たちも、さぞ落着
いて休むやうになるだらうといふやうな意味のがあつた。

しつとりと

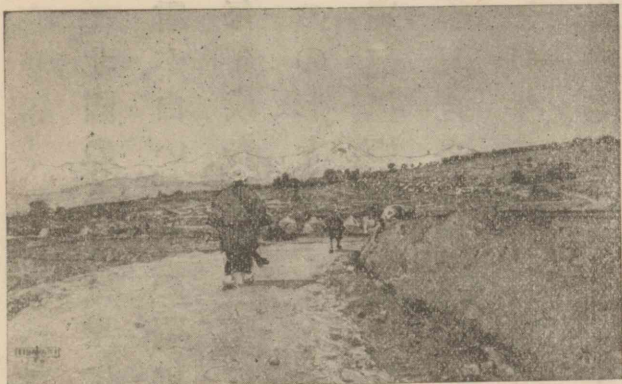
私はそれをひどくおもしろいと感じた。青葉の季節になつ
て落着くのは、鳥ばかりではないであらう。花が咲いたり散
つたりしてゐる間は、なんとなくあわたゞしい氣持になり
がちであるが、愈、咲くだけの花が咲き、そして、散るだけの花
が散つてしまつて、大地が見る限り一様に鮮かな緑に包ま
れると、いつとなしに氣持がしつとりと落着いてくる。そし
て、一味の快い憂鬱うれひをさへ混へた潤のある静けさが、生き生
きと燃上る心全體を、ふうわりと包むやうに感じられる。
盛春の花は心を浮立たせる。初夏の若葉も一面に於て心
を燃上らすには違ひないが、しかし、それと同時に、その燃上
らうとする心を、ともすれば憂鬱にまで沈ますことがある

ほどの、しつとりした潤のある静けさを以て包むやうに感じられる。徒に上へ上へと燃上るのでなく、徒に外へ外へと溢れ出るのではなく、内に漲り籠つて温かみと潤とに充ちた心の静けさ、青葉の天地の與へるさうした氣分を、私は愛せずにはゐられない。

總じて草木の風姿は、開花期に於てはなんとなく落着がない。樹木のほんたうな風姿を見ることのできるのは、青葉時に於てであるやうに思はれる。これも私だけの偏した趣味からかも知れないが、どうも私には花の咲いてゐる木の姿よりも、青葉時の樹木の姿の方が安らかに眺められる。里や、里近い小山が悉く青葉に包まれる頃になつても、北

崇高な感

讃仰す



北國街道 (茨木猪之吉筆)

國では遠山の雪がまだ消えない。緑の野を越え、青葉の森や小山を越えて、向ふの空には眞白な山の連なりが高く聳えてゐる。燃えるやうな若葉の森の梢の上に、日に輝く雪山の姿を望む時、私はいひやうのない崇高な感に打たれる。大空高く嚴かに聳え立つた雪山の美は、恐らく太古の人々も讃嘆せずにはゐられなかつたところであらう。そして、今のこの文明の世に於ても、恐らくこれを讃仰しない人はいないであらう。

苗代の苗あをあと伸びにけり

みやまはいまだ雪のしろきに

北國の高山は、里に苗代の苗が伸びる頃になつてもまだ雪が白い。田植の頃になつてもまだ白い。それに奇妙なのは、毎年或一定の時期に、高い山の消え残りの雪が、毎年同じものの形を現すことである。私の地方^(一)について見ると、焼山の蝙蝠^(二)、黒姫山の臥牛^(三)、駒ヶ嶽の奔馬などがそれである。それ等が見え出す頃になると、人々は、それも、もう焼山の蝙蝠や黒姫の臥牛の見える時分だぞ、などといつて、子供たちにその形を捜させる。そしてそのことが、子供たちの心にどんなに神秘的な感じを興へるかわからない。大人の頭で考へて見れ

(一)新潟縣西頸城郡糸魚川町。
(二)同縣中頸城郡西頸城郡兩郡に跨がる。海抜七九二三尺。
(三)西頸城郡の西部にある。海抜三六一七尺。
(四)西頸城郡。

神秘的

空想に耽る

ば、なんでもないことである。しかし、子供心には、それが不思議でならないのである。私たちも幼い頃、毎年それについて、どんなに空想に耽つたかわからない。

恐らくこれなども、遠い昔からの言傳なのであらう。そして、どの山にはなんの形が毎年きまつて現れるといふことを確かめる爲には、いかに多くの人々が、いかに深い思を寄せて、それ等の山々を眺め楽しんだことであらう。しかも、それぞれに山に現れるそれぞれのものの形について、それぞれさまさまな傳説さへもあるところから考へると、いかに多くの人々の、いかに雑多な空想が、それ等の山々に寄せられて來たことであらう。

〔芹〕

峰の雪

西條 八十

遠くの遠くの峰の雪、

田ぜり萌えてもまだ溶けぬ。

遠くの遠くの峰の雪、

つくし摘む日もまだ溶けぬ。

苗代小田に鳴く蛙

聴きつゝ母と眠る夜も、

優しく夢にかゞやきて

星の光にまだ溶けぬ

遠くの遠くの峰の雪、

一一 趣味の巖島

五十嵐 力

趣味の眼から見た巖島(一)の中心の味はひはどこにあるか
といへば、私たちは第一に彌山(二)を背景として立つた低い廣

(一) 廣島縣佐伯郡
大野村から七
町
(二) 島の中央なる
高山をいふ。

い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところに



巖 島 (川村曼舟筆)

あると思ふ。

まづ藝州

本土の對岸

から船をや

とうて、ぎい

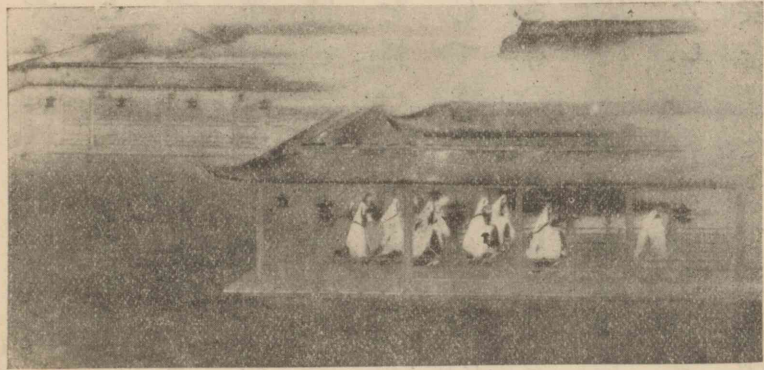
ぎいと艦の

音おもしろ

く漕出でる。青一色で塗りつぶしたやうな恰好のよい島だ
と思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた色彩
の社殿や堂塔が、次第に著しく浮出てくる。初には木片を立

てたやうに見えた鳥居が、だんだんと大きさを加へてくる。また漕ぐほどに、鳥居も、社殿堂塔も、益々大きき鮮かさを加へてくる。その中に次第に進んで大鳥居の下にくると、私たちは覺えず驚きの目を見はるであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつてゐるではないか。向ふを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓には、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱にゆるやかに反つた檜皮ぶきの神々しい姿を、水面に映してゐるではないか。その色彩を見よ。形状を見よ。一つ一つの建物の整つた姿を見よ。多くの建物が廻廊や橋に繋がれて、美しい釣合を表してゐるのを見よ。なん

檜皮ぶき



(筆 坡 小 藤 伊) 廊 廻

といふ美しさ、氣高さ、神々しさであらう。社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右に、百二十七間といふ長い廊下が廻らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この、寶殿を中心として、檜皮ぶきや瓦棟の多くの建物が、朱塗の圓柱に支へられて、低く美しく並んでゐる趣。縦向、横向、いろいろな社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げた

堅魚木

やうに横長に建つてゐる趣、更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚長のすくやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮かんだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣、これ等のすべてが、なんともいはれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣、高さ、大きさ、ものものしさ、荒々しさは、前後の護衛者たる山や、海や、鳥居に譲つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、しびも、しやち鉢もない尋常な檜皮ぶきを、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣、この重疊累積した美しさ、ゆかしさを、

何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんなことを考へる。設計者の鬼神は、海底ででき上つた龍宮城を、巖島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上るのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、ここだといふ所で、びたりとせり上げを中止させたであらう。そして、これを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置に定めたのであらうと。

——甲鳥園隨筆——

凝視

立脚點

自修文

一一一 パリだより

吉江 喬松

パリの美しいのは、春の末、夏の初です。

(1) Maronnier.
(椽)

(2) 鳩の一種。
ちいばとも
すや

(3) Africa.
(阿弗利加、阿
非利加)

(4) マロニエといふ、日本ならばとちのやうな木が、パリの町々の
両側に立並んでゐて、その若葉が青く光つて、こんもりと茂りだ
してくると、その中から珠數掛鳩(すずかかき)のほうほういふ聲が聞えだし
ます。すると、その茂つた葉の間から、白や赤の蠟燭のやうな形を
した花が、大きく一面に咲きだすのです。

パリ全體がこの若葉と花とに包まれる頃になると、日本には
ゐない、そして、日本のよりは一層大きな燕が、アフリカの方から
飛んで来て、パリの舊い大きなお寺の塔の上に巢を造ります。こ
の燕は羽が大きく、脚が小さいので、いつも空を飛んでゐるか、高
い塔の頂(いたき)や木の上に止つてゐるかだけで、地の上におりること
はできません。地上におりると、羽がつかへて歩けないのです。

夕方の空が牡丹色に染まつて、空氣が柔かで、なんともいへな
い氣持になる中を、この大燕がゆつたり飛んでゐるのを見ると、

搖籃
ゆりかご。

いかにも違つた國に来てゐる心持がします。その時、寺々の高い
鐘樓(しやうろう)からは、れやかな澄んだ鐘の音が
響きます。この鐘の音が空で響き合は
せ、パリ全體へ夕方の休を告知らせる
のです。この鐘の音を聞いた時は、人々
は仕事の手を休めて、家路へ歸るした
くをするのです。野で働いてゐる人々
は、鋤の手をやめて、夕方のお祈をしま
す。日曜日だと、この鐘の音が、寺々によ
つて、それぞれの音樂の曲を打鳴らす
ので、空中全體が、華やかな合奏場(がっそうじやう)のや
うになります。生まれつき音樂好の小
兒は、搖籃(ゆりかご)に入れられてゐる時から、この寺の鐘の音が奏する音



(筆一レミ) 祈のべふゆ

樂で、思はず手足を搖動かすといふことです。

このパリ全市を埋めるマロニエの若葉の下を、眞白な姿をした、白い紗シヤの布を頭からうしろへ長く垂れた靴までも白い十二三の少女たちが、両親や兄弟たちにつれられて、幾人も幾人も通つて行きます。私はパリに着いたばかりの頃、それが花嫁姿かと思つて、小さい花嫁が幾人も一時にできたものだと思つて、人ひとにきいて笑はれたことがあります。これは始めてキリストChristの教を受けて、そのおゆるしが出たしるしに、汚れない純白な姿をして、キリストの前に立つのです。涼しい朝風に眞白な紗を吹かせながら、若葉の下を通つて行くこの女の子の姿は、白い蝶々が舞つて行くやうです。

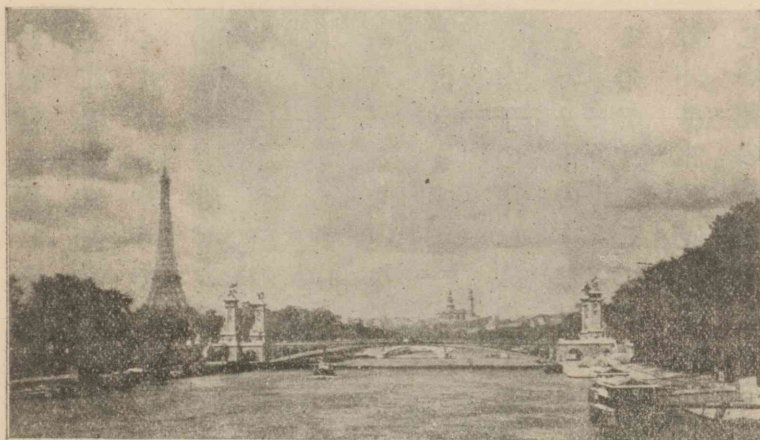
Christ
(基督)

その頃パリには、ちやうど女王の祭があります。一種の花祭といつてもよいのでせう。パリ中の若い美人を選び出して、立派な

練歩ねりあるく
ゆつたりある

分乗ぶんじやうす
わかれてのる。

玉座ぎよざ
王様の居るべき座所



王様の車に載せて、パリの町を練歩ねりあるくのです。第一の女王を選び、それから續いて幾人もフランスの町々の女王を選び、それをいくつかの緋ひや赤や紫の幕で、鉾こさや旗で飾りたてた王様の金の車に載せるのです。この女王たちには、それぞれの従者がついてゐて、同じ車や、違つた車に分乗して、ついて行きます。

(河) この車の前後に樂隊がついて、賑やかにやして行く。女王は金の冠かんむりを戴いて、背後には眞紅まこうな長い裾すそをひいて、玉座にかけてゐます。一段下

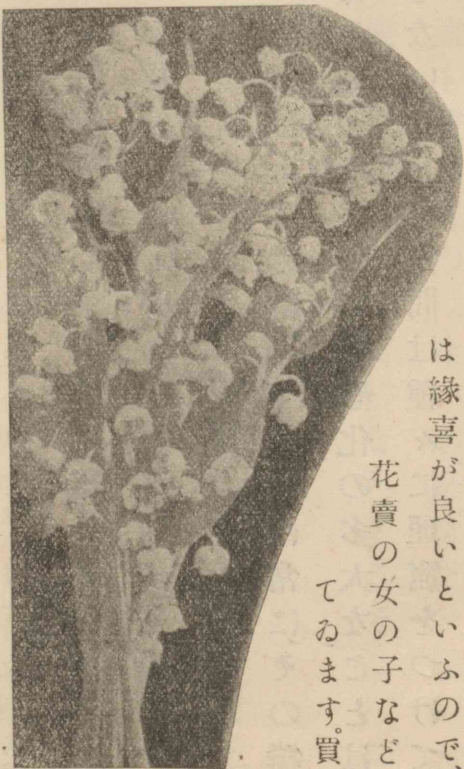
満載す
いづばいの
せる。

には四人、更にその下には八人と、高い車が飾りたてた人を満載してゐるのです。この車には特に花が飾られて、人は花の中に埋つてゐるやうです。その上、車の通つて行く町々では、両側からその車を目掛けて、さまざまな花を投げかけます。また町では、花の代りに、赤や白の紙の細かに切つたのを、誰でも通りがかりの人の頭から、背中から投げかける。これを浴びせかけられても、誰一人怒るものなどはありません。みんな愉快さうに笑つて、通つて行きます。

大統領
フランスの主
権者。

女王の車は、人の中を、また花の中を押分けて、幾臺も通る。そして、パリ市の主な場所をめぐるつてから、やがて大統領の官宅へ集まるのです。ここでは、大統領夫妻が自ら階段まで出て来て、名譽あるパリ市の花の女王に、花束を授けます。この日は、パリ全市が美しい花の祭の日になるのです。

Muguet.
鈴蘭とも、
みかげ草とも、
また谷間のひ
めゆりともい
ふ。



鈴 蘭

五月一日には、また人々が必ずミュゲの花を胸につけます。鈴蘭の花です。日本では北海道に多く咲く匂の高い草花です。これは縁喜が良いといふので、町々の角などでは、花賣の女の子などが、聲をあげて賣つてゐます。買はない人はありません。これは長い

冬の間、霧や小雨や曇日が続いてゐた後に、はれやかな春が来たのを、心から悦ばしく思つて、そのしるしに人々がこの花を摘取つて、「春が来た。春が来た」と悦んだことから始つたのでせう。實際フランスでは、春といつても、日本のやうに花の盛がその

しるしではなく、寧ろ日本の初夏の若葉が、すぐ冬の後へくるので、一度春になれば、はれやかなのびのびした気分が、一時に始るのです。

實に春の末から夏の初へかけてのパリは、美しく、そして、楽しい天地です。

一三 松と大和心

池邊 義象

自然は人生の鑄型で、人間は常にその鑄型の中に泳いでゐる。随つてその影響感化の多大なことは、素よりいふまでもない。まして人間は種々に理窟をつけて、自然を味ははうとしてゐるのではないか。本居宣長が一たび敷島の「大和心」を櫻花に比して以來、また藤田東湖が萬朶の櫻を神州正大の

鑄型

萬朶

ひびく
松の
心
大和
心

(一)景行天皇の皇子熊襲を征して東方の蝦夷を征し、伊吹山近江の吹上伊勢に能く野を荒らしたる御年七十三年

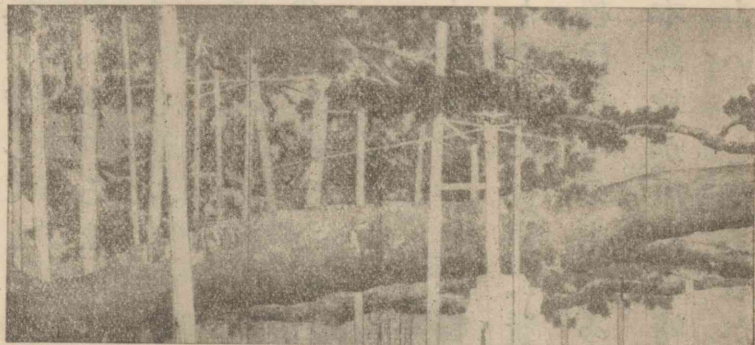
氣の發して成つたものと唱へて以來、櫻は大和心の異名と稱へられるまでになつた。これは素より異論のないところで、誰も争ふものはないが、余はたゞ櫻が大和心の特質全體を表してゐるとは信じない。そこでこれに松を附加へて、その缺を補ひたいと思ふ。

松の起りはどこの國にあるか知らないが、現世界に於て、わが國のやうに松の多い所はあるまい。また土地に適して、かやうに見事に發生してゐる國もあるまい。この點に於て、松は日本の木であるといつても差支はないと思ふ。かの日本武尊が尾津の崎なる一つ松と詠みになつたのは、随分古いことであるが、松はそのずつと以前から、わが國の到る

一三 松と大和心

五三

媚
阿
る
ぶ
群
小



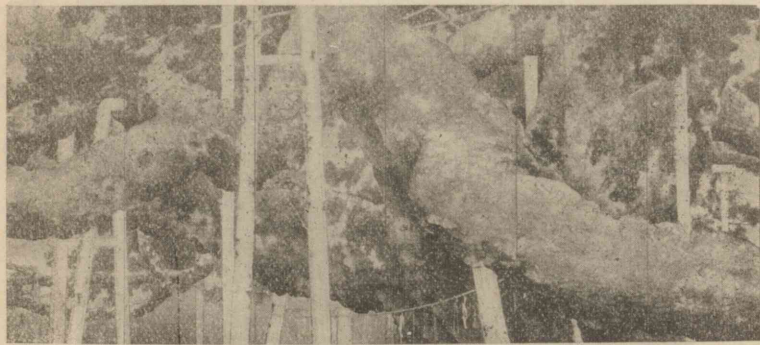
一のそ (筆雲掃種千) 松 老

所にあつたものと思ふ。櫻が日本の花であると共に、松は確かに日本の木である。
この松の、露霜を凌ぎ、雪霰を冒して、少しもその色を改めない高い操の如きは、今更いふまでもなく、わが大和心の雄々しさに比べて、決して不足はない。また大抵の草木は美花を着けて、世に媚び人に阿る観があるのに、松だけは不動の姿勢をとつて、そんな人目を喜ばせるやうな群

風
潮

元
勳

彈
琴
の
響



二のそ (筆雲掃種千) 松 老

小の仕業を嘲笑して、いつも緑色を保持し、風潮に動かされない有様は、正に大丈夫の態度を備へてゐると見なければならぬ。殊に年を経ると共に、その幹が龍の如く、虎の如く、鳳凰の如く、麒麟の如く、世人に畏敬され、愛重されるさまは、元勳、偉人にも譬ふべきであらう。
松は此の如く剛性のものであるが、一たび吹く風を宿せば、彈琴の響を傳へ、或は長堤十里、霞を曳き、霧を

(一)宮城縣松島灣
 内なる數百の
 島々が繁茂
 しく老松が
 美しく風光
 甚だ美しい
 (二)静岡縣 駿河
 灣につぎ出
 る。長さ四
 町餘。
 (三)京都府 宮津
 灣の西北岸か
 ら東南につぎ
 出てゐる。長
 さ二十七町餘。



ないわけではあるまい。

吹いて、まるで繪のやうな光景を呈することがある。また波
 打際に枝を垂れては水とその清さ
 を争ひ、或は少年少女に引かれてそ
 の齡を延すなど、その優美柔和な點
 に於ても、またわが大和心に通ふこ
 とは決して少くない。松島や、三保や、
 天橋立の如きいはゆる天下の奇勝
 を以て鳴る土地が、松に負ふところ
 の少くないのも、國民がそれ等の勝
 地を歎賞して已まないのも、謂れが

堅忍不拔
泰然自若

津々浦々

かやうにいひたてれば限りもないが、剛柔両性を具備し
 て、堅忍不拔、泰然自若として風潮に動搖しないのは、自覺あ
 る日本人に比して、斷じて不足はない。一時に咲き、一時に散
 るその潔き有様や、花に一點の醜をとゞめないその美は、櫻
 を以て花の第一とし、わが大和心に似てゐるところを賞す
 るのは、今更いふまでもないが、この松の貴ぶべきところも、
 また大いに味はふべきである。この木は畏くも神前、宮庭を
 はじめ、津々浦々に至るまで、一木を見ない所はなく、風景に、
 盆栽に、繪畫に、わが國人が昔からこれを好むのも、その心が
 互に相通ずる爲であらう。あゝ、この松、剛柔二性を備へる松、全國全家悉く有する松

が、どうしてわが國民に感化を與へないで居らうか。私はここに櫻と相並べて松を以て日本の木とし、大和心の象徴として、更に大いに賞揚したいと思ふのである。

一四 歌話

中村秋香

一 とりゐ坂

白河樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはせしころ、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼しけり。大火といふまでもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、
この火事は人の命をとりゐ坂

(一)松平越中守定
信。磐城國白
河の城主。後、
老中となつた。
文政十二年
(一四八九年)
歿。年七十二。
(二)江戸城田安門
内。
類焼

手紙の
おぼろ

落首

これより上のとがはないぜん
と落首せるものありけり。近侍の人々興じ笑ひて、「いかにも

すまふ

怪我



白河樂翁

よく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まんにはさはいはじ。」とありければ、奥醫師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらするに、「いはじ。いはじ。」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我のことなり』といふべ

きなり。」とあり。

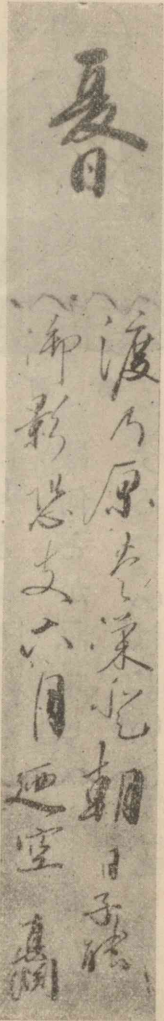
一句のことにて一首の意味を全く顛倒せしめ、過のやみ

梅檀の二葉

難きに出づるを明らかにせられしこと、誠に「梅檀の二葉」とぞいふべき。

二 あがたの宿

(一) 延享某の年の秋江戸大風雨にて、市中とところどころの人



蹟筆淵真茂賀

家破損しけるあけの日、賀茂真淵翁の許へ、門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机によりて沈思吟詠せり。烈しき風雨にも候ひ

(一) 江戸の國學者、岡部氏。家を縣居と號した。明和六年(一七六九年)卒。四十九年(一七九二年)卒。年七十三。

狼藉たり

沈思

(一) 櫻町天皇の御代。今より約百八十年前。

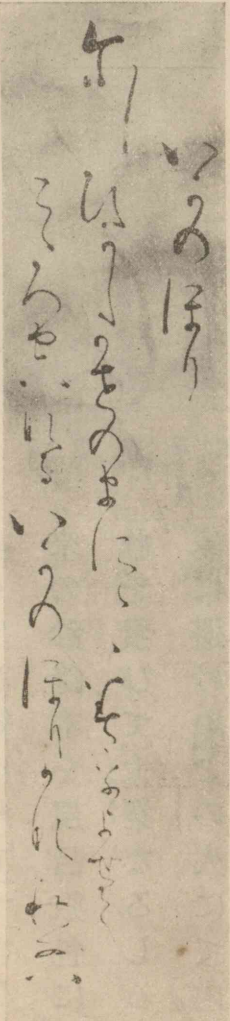
わたの原とよさかのほとよの朝日の子の御影かしこき六月の空

しかな。といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん。顧て會釋しつゝ、餘談に及ばず、この嵐にて一首出で來ぬ。とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿はあれにけり

月見に來よと誰にいはまし

野分



蹟筆香秋村中

三 燒野の原

(一) 天明の火災にて、小澤蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告

(一) 光格天皇の御代。火災は天明八年(一八二四年)。(二) 京都の歌人。享和元年(一八二一年)卒。四十六年(一八一九年)卒。

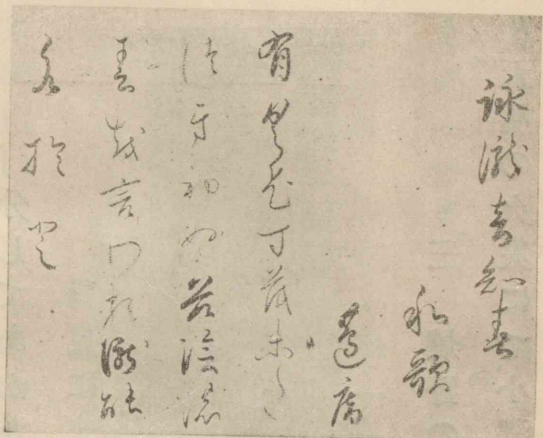
いかにほりしひのまにまにみよのまにせにみよのまにほりかろかほりかろかほりかろか

詠 瀧 音 知 春
和 歌
う く ひ す も
ま た つ け
め の 谷 か け
の 春 を こ と
お と 瀧 の 水

鈔録本

(一)山城國葛野郡

カスミ
白雲
野原
たりける



小澤蘆庵筆蹟

の焼跡を拜し奉りて、

けさ見れば焼野の原となりけり

これやきのふの玉敷の庭

—新説歌がたり—

玉敷の庭

一五 大河

白鳥省吾

雨はふる。雨はふる。

いつも繚りかへす退屈な雨の歌。

本のページを開くのもものうく、

うすい日ざしをながめて

あくびをかみしめる。

しかし、一步そとに出て

堤防の上に立つと、

大河はものすごく濁つて、

うなるやうに流れてゐた。

足下にはクローバの花が

(頁) Page

(欠伸)

(Clover)
似た植物、
らまじやしに

星のやうに咲いてゐた。

おゝ、美しい体なき自然よ。

雨よふれふれ。

大河よ流れ行け。

かなたにははてもない海、

かなたには暗れやかな夏が待つ。

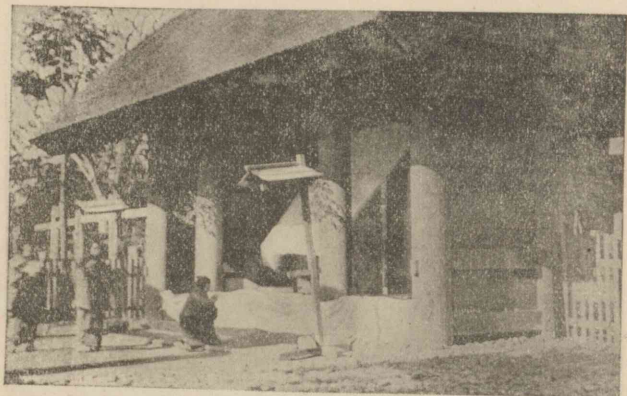
一六 神社

社格
宮司
禰宜

神社はその社格によりて數多の種類に分たる。最も高位にあるは伊勢の大神宮なり。國家の大事ある毎に、天皇は必ず神宮に御奉告あらせ給ふ。神宮には祭主、宮司、禰宜等あり

官幣社

由緒



て、祭主は皇族これに當らせ給ふ。たゞ今の祭主は久邇宮多

嘉王殿下にまします。

次は官幣社にして、大中小の三階

級あり。山城にては石清水の八幡、上

下賀茂の社、松尾、平野、稻荷等、大和に

ては春日、大神、廣瀨、龍田等、尾張の熱

田神宮、出雲の大社、常陸の鹿島、下總

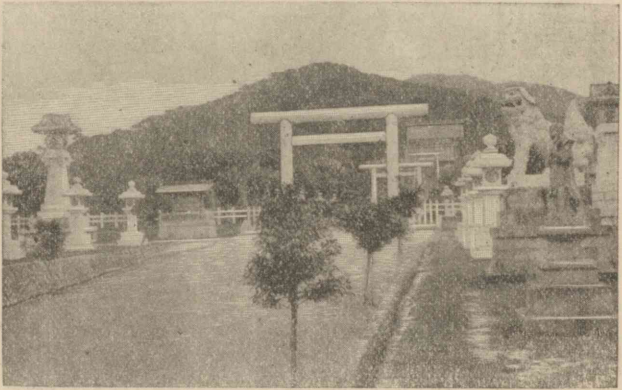
の香取、筑前の香椎、越前の氣比等は

古來由緒ある神社にして、官幣の大

社なり。

明治以後に創建せられたる大社には、神武天皇を奉祀せ

清樸簡古



鎮護

明治天皇及び昭憲皇太后の神靈を鎮めまつれる明治神

る大和の橿原神宮、また桓武天皇を祀れる京都の平安神宮等あり。平安神宮の建築は昔時の大極殿を模したるを以て、他の清樸簡古なるとは異なり、社殿頗る華麗なり。臺灣神社も官幣大社にして、大國魂神、大己貴神、少彥名神及び能久親王を祀り、樺太神社もまた前三神を祭神とし、朝鮮神社は天照大神と明治天皇とを祭神として、いづれも新領土の鎮護とせり。



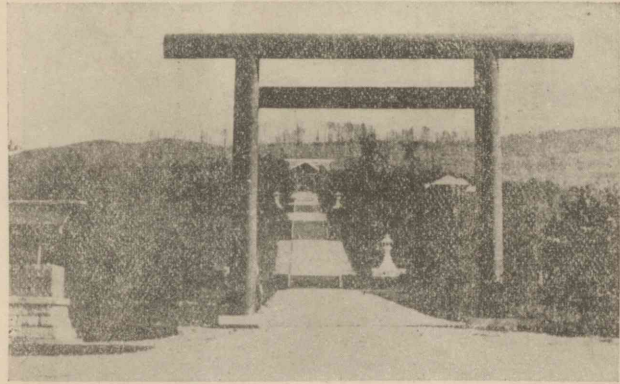
豊臣秀吉の豊國神社、徳川家康の東照宮、維新前及び維新以

宮は東京の市外代々木に在り。大正九年十一月新たに工成りて、御鎮座式を擧げさせらる。また官幣大社にして、實に聖代の最大記念たり。

明治五年官幣大中小社の外に、別格官幣社といふを定め給へり。これ國家皇室の功臣を奉祀せるものにして、楠木正成を祀れる湊川神社、新田義貞を祀れる藤島神社、楠木正行の四條畷神社、藤原鎌足の談山神社

國幣社

後の殉難戦死者を祀れる靖國神社の如きこれなり。



國幣社は官幣社に次ぎ、また大中
小の三階級あり。能登の氣多神社、伊
豫の大山祇神社、筑後の高良神社、伊
勢の多度神社、出雲の熊野神社は國
幣大社たり。官國幣社の數は百八十
餘あり。

社 神 太 樺
下りては府社、縣社にして、府縣の
人民これを祀り、郷社は郷邑の産土
神にして、一郷若しくは數町村これ
を祀り、村社は一村これを祀る。縣社以下神社の總數は一萬

Handwritten mark at the top of the page.

讀經祈禱
截然
混淆

以上に達せり。

中古以來、神佛の間漸く混雜を來し、神社に附屬せる寺院
を建立して、これを神宮寺または神宮院と稱し、社僧ありて
讀經祈禱を爲すに至れり。ここに於て神佛の間に截然たる
區別をなし難かりしが、明治の初年神佛混淆を禁ぜしより、
二者判然として別れたり。しかも今なほ神社にして寺院の
山門に類せるものを有し、寺院にしてその境内に神を祀れ
るものあり。

一七 鏡

「鏡は一物を蓄へず、私の心なくして萬象を照らすに、是非

(一) 姓は北畠。吉野朝の忠臣。正平九年(二〇) 名生に薨じた。

善悪の姿あらはれずといふことなし。と親房卿はいへり。鏡はもと形を照らす具なれども、やがては心を照らすものもせらる。凡そ人の心はその面に表るゝこと多し。悲しめば泣き、喜べば笑ひ、憂ふる時は眉をひそめ、怒る時は目を逆立つ。わが感情の激する時、我は自ら覺らねども、他人より見れば、明らかに心の奥の知らるゝぞかし、かゝるをり自ら鏡を取りて照らし見んに、いかでかその姿の醜く口惜しからざらん。古き歌に、

鏡には姿ばかりの映るぞと

おもふ心のはづかしきかな

鏡は古より女子の魂と稱して、男子の刀にたぐへいへり。

これその姿容を整へよといふのみにはあらず。女子は殊に感情の激し易きものなれば、朝に夕にこれに向かひて、自ら省よとの訓なるべし。

わが國民の鏡を重んずることは、その由來最も遠し。八咫鏡の三種の神器の一として、伊勢の内宮にましますこと、申すも畏し。神社の拜殿に神鏡を懸けたるは、太古よりの遺風にて、これに對ひて明く清き心を照らし見んの意なるべし。畏かれども明治天皇の御製にも、

さかき葉にかくる鏡をかゝみにて

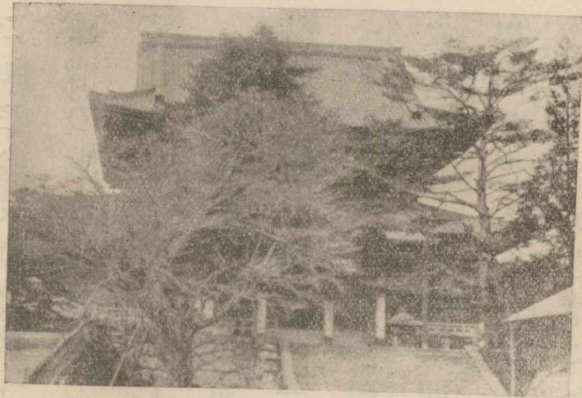
人も心を磨けとぞおもふ

— 高等小學讀本 —

(一)第二十九代。
(二)欽明天皇の十三年(一二二二年)。

名院巨刹

(三)生駒郡法隆寺村。聖德太子の建立。



一八 佛閣

高野山金堂

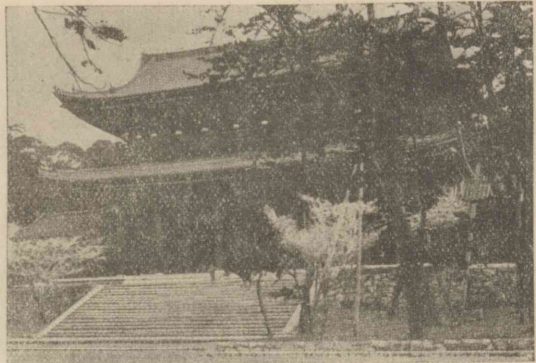
欽明^(一)の御代^(二)佛教始めて渡來し漸次隆盛となり奈良平安の時代に至りては上下の尊崇その極に達せしかば名院巨刹は今なほ大和山城に多し。
大和の東大寺は巨大なる佛像即ち奈良の大佛を以て世に顯れ法隆寺はわが國最古の建築物として美術上より見古建築たる上より見て

大和山城に達した

伽藍

(一)近江の人。弘仁十三年(八二二年)寂。
(二)讃岐の人。承和二年(九四五年)寂。
(三)滋賀縣滋賀郡歸依。
(四)和歌山縣伊都郡。

兵火に罹る



知恩院

眞に國家の重寶たり。その他幾多の堂塔伽藍は今に残りて、

昔の繁榮を語る。

菊の香や

奈良には古き佛たち

芭蕉

平安時代の初最澄^(一)傳教大師^(二)空海^(三)(弘法大師)の二高僧あり。一は比叡山に延曆寺を建てて天台宗を唱へ、朝廷の御歸依厚く、一は高野山に金剛寺を創めて眞言宗を説き、廣く庶民の信仰をつなげり。延曆寺はいくたびか兵火に罹り、僅かに一部分の堂塔を残し、

高野山は蓮華八葉の靈場今に顯然たり。^(一)三井寺即ち園城寺

蓮華八葉の靈場
^(一)弘文天皇の皇子與多王の建立
形勝の地區
蘭若廢墟



西本願寺 (門使勅)

萬壽寺あり。^(二)金閣及び銀閣は建築と庭園とを以て世に名高

^(二)京都市の西北部足利將軍義滿の建立
^(三)京都市の東北隅足利將軍義政の建立

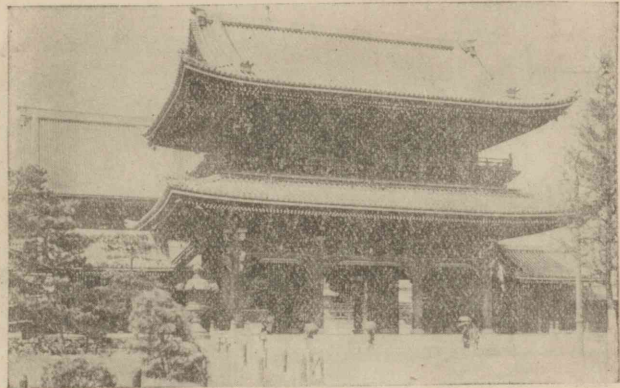
た、かばやけふの月

芭蕉

鎌倉室町時代には禪宗の各派相
ついで起り、今京都に禪宗の五山と
て、天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺及び

く、足利將軍榮華の名残を留む。鎌倉にも禪宗の五山あり。即

ち建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺これなり。



東本願寺

法然上人が開ける淨土宗の巨刹
は京都の知恩院にして、東山翠微の
間にその鐘聲を絶たず、親鸞を開祖
とせる眞宗は數多の派に分れたれ
ども、就中東西兩本願寺を以てその
冠たるものとなし、共に下俗の地に
在りて、民衆の渴仰を受く。

日蓮上人の遺跡は關東に多く、身延山の久遠寺、池上の本

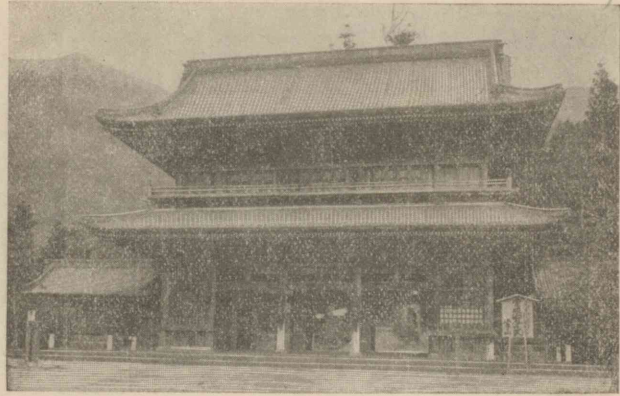
^(三)安房の人。日蓮法華宗の開祖。弘安五年(一〇九四)寂。年六十一。
^(四)山梨縣南巨摩郡。
^(五)東京府荏原郡。

^(一)名は源空。美作の人。建暦十二年(一一八七)寂。年八十七。
翠微
^(二)高僧。京都の人。弘長二年(一一九二)寂。年八十九。

日東中 題目

立正の南無
の
立正
雑沓
夕

門寺には法華の題目耳にかしまし。



て、その僧侶は常に全國を周遊遍歴し、永く一遍上人の衣鉢

東京には有名なる淺草寺あり。天台宗に屬し、その境内は公園となり、身參詣遊覽の徒多く、常に雜沓を極む。延芝の増上寺及び小石川の傳通院は山共に淨土宗にして、徳川氏の建立に本係れる名刹なりしが、惜しむべし近年炎上して、今存するはいづれも再建のものなり。

(一) 神奈川縣藤澤町 遍歴す
(二) 伊豫の人。宗の開祖。正應二年(一九四九年)寂。年五十一。衣鉢を傳ふ

を傳ふ。

膾炙す

信州の善光寺は天台宗にして、牛にひかれて善光寺參り。の傳説は永く人口に膾炙せり。

陽炎や手に下駄はいて善光寺 一茶

一九 芭蕉の花 吉村冬彦

晴上つて急に暑くなつた。時々涼しい風が來て、軒のガラスの風鈴を鳴らす。床の前には、ほろ蚊帳の中に、俊坊が顔を眞赤にして、枕を脱して俯向に寝て居る。縁側へ出て見ると、庭はもう半分蔭になつて、蔭と日向との境を蟻がうろうろして出入して居る。戸袋の前に大きな廣葉を伸した芭蕉の

(幌)

中の一株には、今年花が咲いた。大きな厚い花瓣が三つ四つ開いたばかりで、とうとう開ききらずに朽ちてしまふのか、少し萎びかゝつたやうである。蟻が二三匹たかつて居る。子供が急に泣きだしたからのぞいて見ると、蚊帳の中に坐つて、手足を投出して泣いて居る。勝手から妻が急いでくる。子供は投出した膝の上で、自分に牛乳の瓶を抱へて、乳首から息もつがず、ごくごく呑む。涙でくしゃくしゃになつた眼で、両親の顔を等分に眺めながら呑んで居る。呑んでしまふと、また思ひ出したやうに泣出す。まだ眼が覺めきらぬと見える。妻は子供をおぶつて縁側に立つ。芭蕉の花。芭蕉の花が咲きましたよ。それ、大きな花でせう。實が生りますよ。あの實は

食べられないか知ら。子供は泣きやんで、芭蕉の花を指して「もゝもゝ」といふ。芭蕉は花が咲くと、それきり枯れてしまふつて、お父ちやまほんたう。」さうよ。だが人間は花が咲かないでも、死んでしまふね。」といつたら、妻は「まあ。」といつたきり、背を揺ぶつて居る。子供が眞似をして「まあ。」といふ。二人で笑つたら、子供も一緒に笑つた。そして、また芭蕉の花を指して「もゝもゝ。」といつた。

自修文

二〇 女の名 附、變體假名

日本上代の婦人の名を、古い戸籍帳などによつて調べて見ると、姉は大姫、妹は小姫などといふのが澤山あるが、一家の娘の名

を皆櫻から取つて、櫻女、若櫻女、葉櫻女、眞櫻女などいふのがあり、また色から取つて、白女、黒女、小黒女、眞黒女などいふのもある。眞黒女といつても、色が黒かつたわけでもあるまい。中には獸の名を取つて、貉女、小貉女などいふのは随分をかしい。すべて姉妹には似よつた名をつけたのが多い。

名の上に「お」を附加へることは、足利時代から流行しだしたものと見えて、太平記にお才といふ女の名が見える。「お」は母音で、優しい響があるから、「お」を附けると優しく、かはいらしく聞えるのである。

「何子」と「子」を附けることが、上流社會の婦人に行はれたことは、式子内親王、藤原彰子などの御名を見てもわかる。今は誰でも附けるやうになつて、自分の名刺にも何子と書く人が多い。もとは敬稱の意味があつた。元來は子といふ語に小さい意味もあるか

(一)後白河天皇の皇女。和歌繪に巧であつた。
(二)藤原道長の女。一條天皇の中宮。

ら、やはりかはいらしく聞えたのであらう。

現今の女の名には、假名を二つ連ねたのが多い。きみ、きく、たけ、うめ、よね、はつなどの類である。しかし、三字名も随分ある。はつえ、かをる、やちよなどの類である。日本の男の名乗は大抵シゲ、ノブ、ヒロブミといふ風に四字名であるから、女の名がその半分で、ア、ヤ、ウメなどといふのは誠にふさはしく、似合ふやうな氣がする。主人が家の中心となつてゐるのに對して、主婦は家の半分を支へてゐるやうな感じがする。これが倒になつてゐて、夫人がシゲ、ノブ、ヒロブミで、その夫君がアヤ、ウメであつては、どうも釣合が悪い。日本の家族制度が、自ら男女の名の上に反映されてゐるのではあるまいか。

出産届の時に書出した字が、いつまでもその本名となるから、片假名で届ければいつまでも片假名、平假名で届ければいつま

でも平假名で書かなければならぬ。一旦變體假名を用ひれば、始終それが本名で、外の假名は用ひないことになつてゐる。この意味から、主要な變體假名を知つてゐることもまた必要である。今左にその主要なのを示す。

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	ゆ	ゆ	よ	よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	わ	わ	わ	わ

二二 田園雜興

大町 桂月

角筈^(一)に住みし頃は三兒ありき。大久保^(二)にて一兒を失ひた

(一) 東京市外淀橋町字角筈。東京市の西郊。
(二) 東京市外大久保町。角筈の北隣。

逍遙

るが、今なほ四兒あり。上の三兒は男にして、末の一兒は女なり。われ性、植物を好めど、動物を好むこと更に甚だし。花美なれど、久しくこれに對すれば變化なきに厭く。動物には變化ありて、終日相對して厭かず。されど四兒をもち立つるに手のかゝるを以て、妄りに多く動物を飼はず。鶏を飼ひしが、犬常に來り襲ひ、その一つ終に犬に奪はれたり。かはいさうに思ひて、飼ふことをやめぬ。小池を掘りて鯉、金魚を飼ふ。われ執筆に倦みて庭に出づる時は、まづ必ずこれに對す。その泳ぐさまなんとなく趣味あり。されどそれを見て喜ぶ。小兒のさまを見れば、なほ一層の趣味を感じ。移り住みてより二三个月の間は、たゞ庭園を逍遙することがおもしろかりしも。

慣れては初のやうには珍しう思はず。小兒をつれ行けば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒の爲に蟬を捕へたり、栗を拾ひたり、また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙常に愉快なるを覺ゆ。目的のあるところ活動あり、活動あるところ常に新趣味あり。世に生まれて目的のなきものは、終に人生の趣味を解せざるべきなり。

○家庭に小兒あるは、庭園に花あるが如し。四兒もあれば閉をつぶすに餘りあり。なるべく戸外に運動せしめんとして、まづぶらんこ二つ設けぬ。生まれて一年半許になれる女の兒も兄の眞似して、わらびの如き手に麻繩しかとつかみて運動するを、こよなき樂みとするを見るが、こよなき樂みなる

蔵

こよなき

親の心、子もたぬ人は知らざるべし。ひとり逍遙しておもしろきもの見つけては、兒にも見せんとて戻りくることあり。子庭に出でて久しく戻らざるに、何をなしゐるにかと懐かしくなりて、そここ尋ねまはり、兒の名を呼ぶ聲を、空しく木魂に答へさすることもしばしばなり。

暇ある毎に庭園を逍遙するにつけて、樹木のさまを見つくし、蟲を見つくしぬ。枝ぶりのおもしろき木は松、梅、楓、柿、櫻、百日紅などなり。松は庭園につきものなり。種類多く、枝ぶりもさまざまなるが、頑健のやうにて、なんとなく卑し。梅はあはずれ女の如し。されど花をつくれば憎らしくはあらず。百日紅の枝ぶりは、垢ぬけしたる女のやうなれど、皮の剥ぐる

頑健

がきずなり。楓は勇肌いまいだの男の如く、柿は實のみ賞せらるゝものなれど、われその枝ぶりに一種の風情あるを愛す。杉はばか正直の人のやうなるが、多く立並べば莊嚴さうげんなり。木の花にては櫻が花主なることいふまでもなし。草花にてはわれ朝顔を愛す。その一朝にして落つること、最もおもしろし。さかり久しき百日紅は人に飽かるべし。されどその花の色、桃李に優れり。概して花の美なるは實甘からず、實の甘きは花美ならず。たゞ桃李は二つながら併せ得たれど、花は梅櫻に若かず、實は梨柿に若かず。常磐木、四時葉をつくれど、また常に枯葉を落す。木は花をつけたり紅葉したり、兀然ごつぜんとして骨立したるものこそよけれ。

兀然

以爲へらく

衣食住の中にてわれ以爲へらく、衣は垢つき居らずして、冬寒からざるだけなれば十分なり。われ他に望なし。食物もからだ相當に滋養を取れば足れり。必ずしも美味あるを望まず。われはたゞ望む。家は壯麗ならざるも、さつぱりして、まはりこみ合はずゆるやかにして、樹木あり眺望たうぼうあらんことを。この望は角筈かくはしに住みて稍かなひ、ここに來りて最もかなへり。一生住めばこの上もなけれど、わが所有に非ず、賣物となり居れば、いづれ買ふ人ありて追出されんこと、角筈村に於ける如くなるべし。されど事の終りたる後より見れば、一二年もあつけなければ、十年もあつけなし。一生もまたあつけなし。一日住めば一日の願足り、一年住めば一年の願足る。

買ふ人あらんまでは、余にとりては浮世の樂土なり。

二三 朝の頌歌 (りめ歌) 川路柳虹

朝は晴れたり、友よ立て、
空ははるかに色澄みて、
高き思に曇なき
聖者の眸しのばしむ。

朝は晴れたり、口すゞぎ、
この曉の生まれゆく
空のさなかに神ありと、
静かにおもへ、汝が胸に。

ほめ歌

日に照らされて煙るもの、
遠き山なみ、町の屋根、
今、勞動のほめ歌の
叫とも聞く汽笛の音。

朝は晴れたり、いざ立たん。
我等恃むはみづからの
營みつくる力のみ。
いざわが路を踏みゆかん。

二三 板倉勝重 新井白石

天正十六年徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至り

(一) 正親町天皇の御代(二二四八年)
(二) 徳川家康
(三) 駿府。今の静岡市のこと。

(一) 徳川家の重臣。三河の人。寶永四年(一七二七)八月二十日歿。年八十二。

て、多くの御家人の中を擇び給ひ、板倉勝重をばここの町奉行に任せられぬ。

初め勝重を召され、この職のこと仰せ下されしが、その任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更に御許なく、勝重さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ふものと謀りてこそ、御返事を申すべけれと申す。徳川殿笑はせ給ひて、さもありなん、罷り歸りて相謀れ」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべきことありとて、告知らする人あり。いかなる幸か候。」といひけるに、勝重ものをもいはず、ほくそゑみて、衣裳ぬぎ棄て座になほり、妻にうち向かひ、さればけふ召されしこと、餘の儀にあらず。こたび御座所を移さるゝに依りて、かの町

ほくそゑむ

餘の儀

奉行
かなふべからず
おこと

堪へ堪へじ
本朝

の奉行たるべき由を仰せ下さる。いかにもかなふべからざる旨を辭し申せど、御許なし。さらばわが家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことはいかに思ふ。といふ。妻は大いに驚きて、あなあさまし。わたくし事などならば、夫婦謀るといふことこそあれ。公にてかゝることやのたまふべき。ましてこれは仰せ下さるゝところなり。殊にその職に堪へ堪へじは、御心にこそあるべけれ。みづからいかで知り候ふべき。といへば、勝重、いやいや、我この職に堪へ堪へじは、わが心一つのみにあらず、御身の心によることにてはへるぞ。まづ心を鎮めてよく聽き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも、奉行、頭人などといはるゝもの、その身を失ひ、

訴を斷る
賄賂
理を判つ

その家を亡さぬは稀なり。或は内縁につきて、訴を斷ること
公ならず。或は賄賂に因りて、理を判つこと私多し。これ等の
災は婦人より起るところあり。我若しこの職奉らん後は、親
しき人の言寄らんことなりとも、訴訟のこと執り給ふまじ
きか。僅かの贈物參らせて候ふことありとも、苞苴のもの受
け給ふまじきか。これ等のことを初として、おことは勝重の
身の上、いかなる不思議のことありとも、差出ても、ものたま
ふまじき由固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずる
ことは、いかにかなふべからず。さればこそ、御身と謀るべ
しとは申したれ。といふ。妻つくづくうち聽きて、誠にのたま
ふところ理にこそはべれ。みづからはいかなる誓をも立て

苞苴

畏まる

なん。とく參りて、畏まらせ給へ。といふ。勝重大いに悦びて、神
にかけ、佛にかけて、堅き誓たてさせて、この上は思ひ置くこ
となし。さらば參らん。とて、衣裳ひきつくろひて出づ。袴の後
腰をもぢりて着たり。妻うしろざまに見て、袴のうしろ悪し
く候。といひて、立寄りて直さんとす。勝重聞きもあへず。され
ばこそ、わが妻に謀らんと申せしは過たざりけれ。勝重が身
の上のこと、いかなる不思議ありとも、差出でも、ものいはじと
誓ひしは、今のほどぞかし。早くも忘れ給へりな。この定なら
んには、勝重職承ることかなふべからず。とて、また衣裳ぬぎ
捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまさまの怠状まゐらす。
「さらばその言葉、いつまでも忘れ給ふな。」といひて、御前に參

もぢる

怠状まゐらす

る。徳川殿いかに。汝が妻は何といひし。と仰せければ、妻にて候ふものが、慎みて承れと申しはべる。と申す。さこそはあらめ。とて、大いに笑はせ給ひしとなり。
 藩翰譜

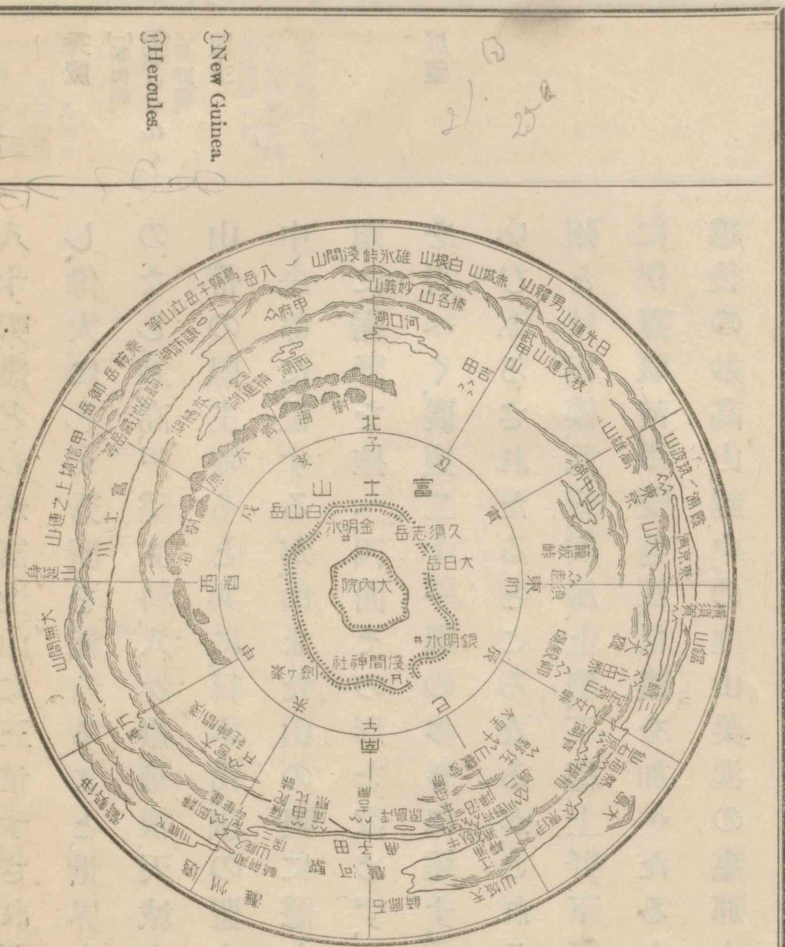
二四 富士の大観

大町 桂月

旅順にて黄金山を攀ぢし時のことなり。旅順要港部の司令官黒井中將我を導く。將軍善く談ず。話柄西歐の天に飛ぶ。イタリーにてベスビオ山に登りし時、一ドイツ人路づれとなる。突然君はいくたび富士山に登りしか。と問ふに「一度登らぬもばか。二度登るもばか。」と答ふれば「富士山の如き立派なる山は、世界に二つとはなし。余は四回登れり。日本に

(一)黒井悋次郎。話柄
 (二) Vesuvio. イタリーのネブルス灣東岸の活火山。

7A 257



生まれながら一度しか登らぬとは、さてさて勿體なきことなり。と笑はれたり。とて笑ひぬ。余も知らず識らず笑ひぬ。
 高さをいはば、二ユーギニヤのヘルキュールス山の如きは、三萬二千七百

秀麗 (一)新潟縣 (二)いづれも長野縣
盟主

展望

八十呎幾どわが富士山に三倍す。されど正しき圓錐形を成し、偉大にして秀麗を極むること、世界中、富士に比すべきものなし。妙高、戸隠、立科、八ヶ嶽、箱根、天城などいはゆる富士火山帯の盟主なると共に、日本山嶽の盟主にして、ほゞ日本の中央部に位するが、山また山の奥に隠れず、東海に接して、周圍に裾野を控へ、四面その形を改めず、近くこれを一周するを得べく、展望二十一國の多きに達す。十三州一目とは、在來いひふるされたるどころなるが、これその實を失へり。十三州とは相模、武藏、安房、上總、下總、上野、下野、常陸の關八州の外に、伊豆、駿河、甲斐、遠江、信濃を加へたるものなるべきが、なほ越後の妙高山、越中の立山、美濃の惠那山、伊勢の朝熊山、尾張

子
子
子

(一)實語教の句。
(二)頼山陽耶馬溪圖卷記の句。

超脱す

(三)歌人。鳥取の人。天保十四年(一八四三)五月二十六年(一八五五)歿。

の小富士、三河の石卷山、信濃より飛驒に跨がれる御嶽、常陸より磐城に跨がれる八溝山より富士を望むを得べければ、富士より二十一國を見下し、二十一國より富士山を仰ぐなり。日本中の佳景といへば、富士の見ゆる所なり。他の條件は具備せりとも、富士見えざれば、なんとなくもの足らぬ心地せらるゝなり。

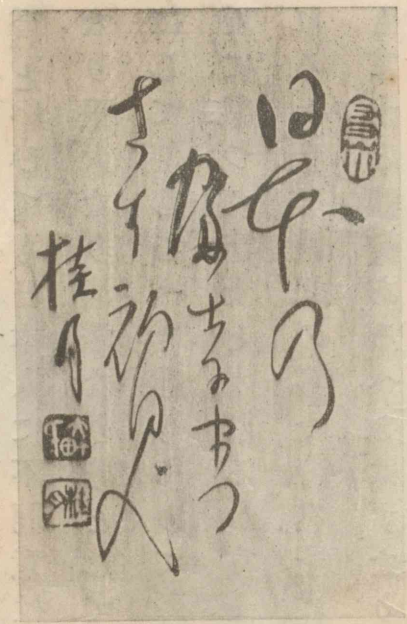
山は必ずしも高きを尙はず、樹あるを尙ぶ。といひ、また山にして水を得ずんば生動せずといへるが、これ普通の山のことなり。一萬二千四百尺の富士山となれば、樹に超脱し、水にも超脱す。高いかな富士の山。全山十合に分つ。麓の一合がすでに附近の群峰の上にある。香川景樹の「群山の高嶺高嶺

をつたひ來て、富士の麓にかゝる白雲は、げに實況なり。脚底に雲を見、雷を聞きつゝ、攀行けば、下界を離れて天に昇る心地す。頂上よりは近く伊豆、相模、駿河、甲斐、信濃などの山々を見下し、駿河灣を見下し、相模灘を見下し、遠州灘を見下し、上總、下總の彼方の太平洋を見下す。太陽の直ちに海より出づるを見る。殊に下界を蔽ひ盡したる雲の海のはてより太陽の昇るを見れば、何人か神聖の感に打たれざらん。氣澄みて月近し。手を伸ばせば届かんとばかり思はる。李白が「不敢高聲、語恐驚天上人」の心地も起るべく、下河邊長流の「富士の嶺に登りて見れば天地は、まだいくほど分れざりけり」の心地も起るべし。

(一)唐の詩人。寶應元年(西曆七六二年)卒。年六十二。
(二)國學者。大和の(人)真享三年(三四年)卒。年六十六。

カリセ
ゴコ
コオ
コオ
コオ
コオ

普通一般に日本國民が神聖の感に打たる、は、二重橋外より皇居を拜する時なるべし。若しくは水清き五十鈴川の彼方、鬱蒼たる神路山の前、大神宮を拜する時なるべし。これを自然界に求むれば、白玲瓏の富士を仰ぐの時なるべし。萬世一系の天皇は人に



大町桂月筆蹟

日本の富士にまつさす
初日哉
桂月
白玲瓏
知らず

して神におはす。神の知らず日本は神州なり。藤田、東湖は神州の正氣を歌ひて、秀爲富士嶽といへり。日本に山は多けれども、神州に相應しき山は、富士の外に求むべからず。東海に

以心傳人
造物主
神聖

默契

(一)山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖。

特立して、白玲瓏たる姿は、げに神州の山なり。神の山なり。本居宣長の「敷島の^{（一）}大和心を人間はば、朝日にはほふ山櫻花」を一轉して、「敷島の^{（一）}大和心を人間はば、朝日にはゆる富士の白雪。」といひても、日本人に不同意はなかるべし。富士山は秀麗なり。正大なり。清淨なり。凜として氣高き趣あると共に、温かにして親しむべき趣もありて、神州の氣象を代表す。大和魂地に凝つて富士となれるか。富士山人に凝つて大和魂となれるか。世界觀光の客なほ富士に傾倒す。神州の國民は、何人も富士と默契あるべきはずなり。^{（一）}世には眺めて好き山あり。登りて好き山あり。富士や眺めても好く、登りても好し。山を見下し、野を見下し、近く五湖を



田子浦の富士 筆方敬田竹

蓬々
仙樂を奏す

見下し、遠く太平洋を見下す。雲と路を争ひて登り、渴して干
秋の雪を掬す。頭上に明月を戴きながら、脚底に雷鳴を聞く。
飛鳥はたゞ背を見る。動物も追隨する能はず。天風蓬々とし
て、いづこともなく仙樂を奏す。

—富士行—

山のあなた

北原 白 秋

山のあなたを

どうして入日が

見わたせば、

速どざる。

あの山こひし、

山のあなたを

里こひし。

ふるさとよ、

山のあなたの

あの空こひし

青空よ、

母こひし。

(一)俳人。名は清。伊豫の人。明治七年生。
芙蓉 支那原産の落葉灌木。高さ四五尺。夏紅色または白色の花をつける。

目録

二五 芙蓉

(一) 高瀨虚子

八月の初頃であつた。ふと庭の面に芙蓉の葉の大きくなつてゐるのが目にとまつた。いつもこの芙蓉の葉の大きくなつてゐるのを見ると、わたしの心は或刺戟を受ける。それはもう秋の近いといふことだ。

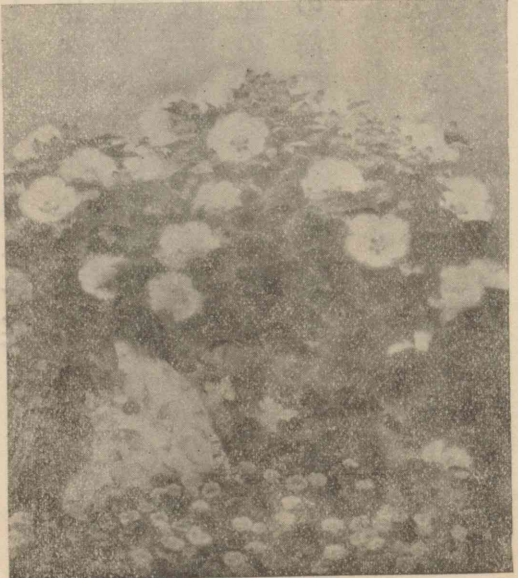
今は土用の眞最中である。しかしながら、秋はすぐ足下に來てゐるといふ感じは、いつもこの芙蓉の葉を見る時起るのである。萩の花もはやぼつぼつ咲いてゐる。葉鶏頭も赤く一二寸に伸びてゐる。目に見える秋の景物も、決して芙蓉の葉にとまらぬのであるが、しかし、この芙蓉の大きな葉が、叢に目立たしく、茂り蔓つてゐるといふことは、秋はすでにかく近づいてゐるのだといふことを、特に力強くさし示してゐるやうに思はれる。

轍鮒のあへぎ 車のわだちの中にあつたふなのうらみ、人の困窮にせまつてゐる譬にいふ。
果然 果たして。
立秋 秋の初の日で、普通八月八日。

それから暑い土用の日は續いた。人々は二三日轍鮒のあへぎをした。土用の暑さもこの頃が頂上だといつた。しかしながら、芙蓉の葉はだんだん大きさを増して來た。

果然、曆の上であすが立秋だといふ日が來た。夜分になつて空の色を見ると、澄みわたつて、どこか新涼な氣を含んでゐた。

さてその翌日の立秋當日になつて見ると、朝は快晴の上天氣であつた。日中は定めて暑いだらうといひ合つた。果して日がかんかんと照りつけて、暑かつた。



(筆成錦山島) 蓉 芙

轟然
とろきひい
くさま
稲村ヶ崎
神奈川縣鎌倉
郡由比ヶ濱
の西新田
貞が海神に祈
り刀を海に投
じた所
極樂寺
稲村ヶ崎の北
約三町
とよもす
ひきわたる
傘なりに
開いた傘のか
つかうにか

それが夕方からはげつそりと涼しくなつた。けふから秋だといふことを見せつけるやうに涼しくなつた。庭の例の芙蓉の葉は、また格別に大きさを増したやうに思はれた。

それから夕方からは由比ヶ濱で花火が揚つた。小さい筒の花火は絶えず揚つた。大きな筒は小さい筒の間を縫うて稀に揚つた。その大きな筒の揚る時は、轟然たる音が稲村ヶ崎から極樂寺の山々、また小坪から材木座の方の山々に響きわたつて、暫く鳴りとよもした。わたしはその筒音と大空に開く音とを聞くばかりで、暫く閉籠つてゐた。

漸く縁に出て見ると、また小さい筒の方が揚つた。松の梢で赤い火がはつと傘なりに開いた。また間もなく小さい筒が揚つた。同じ所に今度は青い火がまた傘なりに開いた。そんなことが連續して五六回も續いた。その花火の煙が雲の如くたなびくのが

澄みわたる
花火の間の
み空かな
虚子

一方の空に見えた。突として天地を轟かすやうな大きな音がした。その音は轟然として、四方の山に響きわたつた。忽ち大空を蔽ふやうな赤色と青色との二重の火の傘が開いた。

やがてその火の傘も消えてしまつた。たゞ白い煙が大空を流れて、一方に消えて行くばかりであつた。

大空は愈澄みわたつてゐた。花火の揚らぬ時のその空の色は、格段に澄んでゐるやうに思はれた。



高濱虚子筆蹟

二六 浮花

五十嵐 力

八月の或日である。五時に起床、朝飯を済ましてから、例の

櫛比鱗接

如く庭に出た。黒い庭を一巡して花庭に行くと、數々の草花が仲善ささうに櫛比鱗接して、露ながらに朝日を迎へてゐる。なんともいはれぬ愛らしさ賑やかさに、ふと思ひついたのは、種々な花を澤山水盤に浮かべたら、綺麗であらうといふことであつた。早速はさみと籠とを持つて來て、花瓣を集める。それから座敷に入つて、徑一尺許の古伊萬里の鉢に水をたゝへて、紅、黄、白、紫と、だんだんに點じて見た。實に綺麗である。紅蜀葵の直徑四寸餘りな大輪を中心として、黄蜀葵、ダリヤ、蝦夷菊、桔梗、朝顔、撫子、睡蓮の中くらゐに大きなのから、天竺葵、孔雀草、矢車草、茄子、胡瓜、さゞげ、美人草、草夾竹桃等を経て、紫の露草、しぼりの露草、藤袴、萩をみなへしなどの細か

點す

妍を競ふ

(一)「秋の露玉にぬかんとすれば消ぬ、よし見ん人は枝ながら見よ、よみ(古今集)よみ人知らず」

(二)京都市の北郊大原村の西北にある尼院。天台宗延暦寺の別所。建禮寺門院の陵がある。
(三)馬關海峡の東北海中。

いのに至るまで、凡そ三十種許、小さい陶器の湖の中に妍を競つた有様は、實に目も覺めるばかりの美しさであつた。自然の樂しみ方にもいろいろあるかと考へつゝ、枝ながら見ん」といつた古人の自然的風流などをしのびながら、暫く眺めてゐるうちに、ふと臨濟の一法友から聞いたことのある洛外大原の寂光院の「浮花」のことを思ひ出した。續いて壇の浦に於ける平家滅亡のをりの海上の光景を思ひ浮かべた。大原の寂光院では、鐵鉢に水を盛り、枝も葉も着かぬ花瓣を浮かして佛に供へるといふことであるが、それはなんの意味であらう、いかなる謂れに因るのであらう、私は知らない。けれども、この謎のやうな供花の法は、或は平家の公だ

(一)安徳天皇。
(二)平清盛の後室
時子。
菩提
(三)建禮門院平徳
子。

ち、女房たちが、壇の浦の波の上に花と散つた末期の光景を象徴して、幼帝^(一)、二位殿をはじめ、一門の菩提を弔ふのではあるまいか。緋の袴を召した女院^(二)の氣高い御姿を繞つて、數多の女房たちの水に浮かんだ光景は、紅蜀葵の大きな赤い花を繞つて、桔梗、朝顔、露草などの浮いてゐるのに似てはゐなかつたらうか。

かやうなことを考へつゝ、私ははかない樂みに半日を費した。そして、この半日の花いぢりによつて、圖らず花やかな悲みと、寂しい喜とを味はふことができた。小さい水鉢の浮花の中に於て、「幼帝入水」大原御幸の二つのしめやかな味はひ深い物語を讀むことができた。

—我が書翰—

二七 郊外所見

竹友藻風

一 鳥

澄みわたる空のおもてにくつきりと、
緑の枝をさし伸すくぬぎの林の、
どこからか縋をするやうな音がして、
わが上を飛過ぎたもの。

白い胸を見たばかりであるが、
行々子でもなく、雀でもない。
縋すれの音を立て、緑の林の
枝から枝へわたり行く群。

二 蟲

(襟)

香味を帯びた夜の風が、
冷たく水のやうに行きわたる
郊外の家におて、聴くともなしに
數知れぬ命を聴いた。

香味を帯びた夜の風が
冷たく水のやうに行きわたる
郊外の家におて聴くともなしに
數知れぬ命を聴いた

さぬた(碓)

こまやかに繖をつむぐもの、(馬道虫)
ほのかにきぬたを打つもの、(鐘 ちいき)
しやべり散らすもの、機を織るもの、
思ひ出したやうに立ちさわぐもの、くつはき、
すると、わが窓の下から、
たゞひとつ歌を歌つたものがある。
また、くの中にその聲が止んで、

あたりがひつそりとした。

二八 桃山御陵 田山花袋

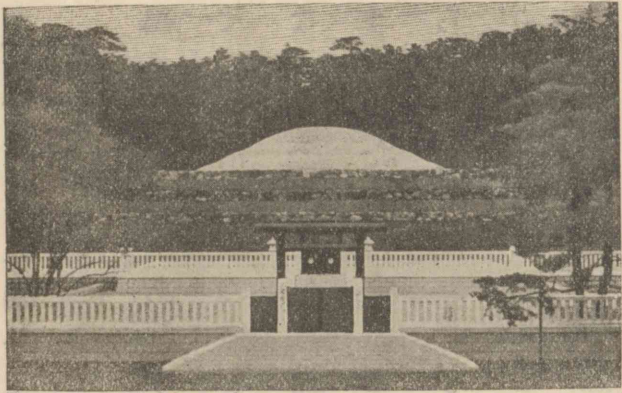
桃山(一)の二つの御陵では、いろいろなことが考へられる。今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私は、その前に額づく(二)と、私たちの見て来たことばかりではなしに、遠い昔のことまでも取集めて考へられずにはゐられないのであつた。私はそこで、天武天皇(三)の陵へ後から持統天皇(四)の陵を合はせたことなどを想ひ起した。また柏原(五)の陵に御子の嗟峨天皇が涙を流して祈念されたことを想ひ起した。それはその大小はあつたにしても、昔ほどの天皇でも、皆私たちが見

(一) 京都府紀伊郡伏見町に隣れる小畑村に在る桃山
(二) 伏見桃山と桃山東陵と
(三) 伏見桃山東陵と
(四) 伏見桃山東陵と
(五) 伏見桃山東陵と
(六) 伏見桃山東陵と
(七) 伏見桃山東陵と
(八) 伏見桃山東陵と
(九) 伏見桃山東陵と
(十) 伏見桃山東陵と
(十一) 伏見桃山東陵と
(十二) 伏見桃山東陵と
(十三) 伏見桃山東陵と
(十四) 伏見桃山東陵と
(十五) 伏見桃山東陵と
(十六) 伏見桃山東陵と
(十七) 伏見桃山東陵と
(十八) 伏見桃山東陵と
(十九) 伏見桃山東陵と
(二十) 伏見桃山東陵と
(二十一) 伏見桃山東陵と
(二十二) 伏見桃山東陵と
(二十三) 伏見桃山東陵と
(二十四) 伏見桃山東陵と
(二十五) 伏見桃山東陵と
(二十六) 伏見桃山東陵と
(二十七) 伏見桃山東陵と
(二十八) 伏見桃山東陵と
(二十九) 伏見桃山東陵と
(三十) 伏見桃山東陵と
(三十一) 伏見桃山東陵と
(三十二) 伏見桃山東陵と
(三十三) 伏見桃山東陵と
(三十四) 伏見桃山東陵と
(三十五) 伏見桃山東陵と
(三十六) 伏見桃山東陵と
(三十七) 伏見桃山東陵と
(三十八) 伏見桃山東陵と
(三十九) 伏見桃山東陵と
(四十) 伏見桃山東陵と
(四十一) 伏見桃山東陵と
(四十二) 伏見桃山東陵と
(四十三) 伏見桃山東陵と
(四十四) 伏見桃山東陵と
(四十五) 伏見桃山東陵と
(四十六) 伏見桃山東陵と
(四十七) 伏見桃山東陵と
(四十八) 伏見桃山東陵と
(四十九) 伏見桃山東陵と
(五十) 伏見桃山東陵と
(五十一) 伏見桃山東陵と
(五十二) 伏見桃山東陵と
(五十三) 伏見桃山東陵と
(五十四) 伏見桃山東陵と
(五十五) 伏見桃山東陵と
(五十六) 伏見桃山東陵と
(五十七) 伏見桃山東陵と
(五十八) 伏見桃山東陵と
(五十九) 伏見桃山東陵と
(六十) 伏見桃山東陵と
(六十一) 伏見桃山東陵と
(六十二) 伏見桃山東陵と
(六十三) 伏見桃山東陵と
(六十四) 伏見桃山東陵と
(六十五) 伏見桃山東陵と
(六十六) 伏見桃山東陵と
(六十七) 伏見桃山東陵と
(六十八) 伏見桃山東陵と
(六十九) 伏見桃山東陵と
(七十) 伏見桃山東陵と
(七十一) 伏見桃山東陵と
(七十二) 伏見桃山東陵と
(七十三) 伏見桃山東陵と
(七十四) 伏見桃山東陵と
(七十五) 伏見桃山東陵と
(七十六) 伏見桃山東陵と
(七十七) 伏見桃山東陵と
(七十八) 伏見桃山東陵と
(七十九) 伏見桃山東陵と
(八十) 伏見桃山東陵と
(八十一) 伏見桃山東陵と
(八十二) 伏見桃山東陵と
(八十三) 伏見桃山東陵と
(八十四) 伏見桃山東陵と
(八十五) 伏見桃山東陵と
(八十六) 伏見桃山東陵と
(八十七) 伏見桃山東陵と
(八十八) 伏見桃山東陵と
(八十九) 伏見桃山東陵と
(九十) 伏見桃山東陵と
(九十一) 伏見桃山東陵と
(九十二) 伏見桃山東陵と
(九十三) 伏見桃山東陵と
(九十四) 伏見桃山東陵と
(九十五) 伏見桃山東陵と
(九十六) 伏見桃山東陵と
(九十七) 伏見桃山東陵と
(九十八) 伏見桃山東陵と
(九十九) 伏見桃山東陵と
(一百) 伏見桃山東陵と

(一)京都市の東南隅・四條天皇を始め數帝の陵のある所。

て來たと同じやうにして、一つ一つその陵を築かれたばかりでなく、その當時の國民の悲嘆をも俱にその中に混ぜて埋葬されたのであつたのであるのに、中世以後はどうなつたであらうか。さうしたことは絶えてしまつて、あの京都の東山の南のはづれに近い泉涌寺の中に、微かにその存在を示されるだけになつたではないか。そして、元からあつた一つ一つの陵などでも、亡びた國の帝王の陵でもあるかのやうに、全く顧られずに何世紀かを過したではないか。中には、どれがどれだか、わからなくなつたやうなものもあつたではないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふことをして置いてはいけなといふことは、足利時

驕奢



桃山御陵

代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれに續いた後繼者も、みんな知らないことはなかつたのであらうけれども、或は經營に忙しく、或は戰亂に追はれ、或は自己の驕奢きょうしゃに心も盲くらひて、そこまで手を出す餘裕はなかつたのであつた。しかし、長い間の歴史の波は、漸く大きなものを打出して來た。私たちは次第に闇い闇い歴史から、眼もきらめくやうな明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵さんりやうの荒廢あつちに着目あつちして、それによつ

徒爾

卑屈

感傷的
脱却す

て勤王の志を燃立たせようとしたもののあつたことなど
も、徒爾には見逃してしまふことのできない事實であつた。
桃山の御陵に参拜するものは、誰かわが大倭の昔を思ひ
出さぬものがあらう。千年にして始めてその昔に還された
その明治天皇の偉きな功業を、自ら戸を閉ぢるやうな卑屈
な政治の状態から脱して、飽くまで外へ外へと伸びて行か
うとしたその立派な對外の硬政策を、なん等の好運ぞ、私た
ちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり力ある世を、ありあ
りと眼の前に見ることができたのである。佛教などに悪く
とらはれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱
却して、更に自由に大きく呼吸づくことができる世に遭逢

したのである。私は桃山陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」
の羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞得るやうな心持
がした。
——花袋行脚——

自修文

二九 ゆかしの杉

幣原坦

(一)福岡縣門司市
税關 輸入品に税を
課すること
を司る役所
好意 ねんごろなこ
ころ
(二)山口縣豊浦郡
長府村下關
市より東西約
二里
(三)乃木希典、長
州の人、陸軍
大將、伯爵、大
正元年九月、大
と共、死した。天
年六十四。

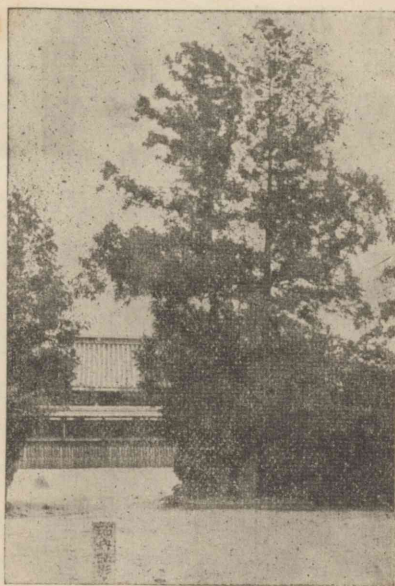
(一) 門司で税關長の好意によつて、わが船の碇泊中に、長府の乃木
神社に参拜する。神社の隣は乃木將軍の舊宅で、邸内は二百餘坪
あるが、家の建坪は僅かに八坪餘に過ぎない。明治元年將軍が父
十郎翁の指圖に従つて、北風を防ぐ爲に植ゑられた杉の苗は、も
はや天を蔽ふばかりに成長し、將軍が歸郷の時、汲んで昔をしの
ばれたといふ井の水は、東北隅の老梅の下に今なほ湧いてゐる。
あゝ、ゆかしの杉よ、懐かしの梅よ。

(Sudan) エジプトスマ
(Khartoum) ナイル河の上
流

天涯地角
極めて遠い地

(Captain) Regatta
見學
實地に見て學ぶこと

この杉の影は今ではたゞ二百餘坪の風を防ぐのみでない。梅の香はまた井戸の邊に薰るばかりでない。その影は世界に廣がり、その香は天下に満ちるともいふべきである。ずつと前に自分が



ゆかしの杉

アフリカの内地を旅行した時、スダンの首府カルツームに於てすら、乃木將軍崇拜の英國士官に會つたことがある。

天涯地角所もあらうに、こんなアフリカの内地で將軍崇拜者に會はうとは、この士官はキャプテン・レッグゲートといつて、仙臺の師團に三年間の見學をした人であつた。士官は自分に向かつていつた、

犬馬の勞
君の命にしたがつて力を尽くすこと
(George) (西曆一八六五年—一九一〇年)
戴冠式
Coronation
譯。ヨーロッパ諸國の君主が即位後にする重要な儀式
(Dublin) アイルランドの首都

「私は日頃乃木將軍を敬慕してゐますので、なんとかして生涯の間、一度將軍の爲に犬馬の勞を執りたいと思つてゐます。幸ひ英國皇帝ジョージ五世陛下の戴冠式には、將軍もロンドンに來られるといふ。その時分には、私もここの守備の任務を了へて、ダブリン聯隊へ歸營することになつてゐる。萬一あなたがその頃英國にゐられるならば、どうぞこの希望を將軍に通じて、何かお役に立つことに私を使つて下さるやうに、取次いではくれませぬか。」
自分は思ひがけない人に、思ひがけない依頼を受けて、初は少し驚いてゐたが、敬慕の情が面に溢れてゐるやうであるので、取敢へずこれを承諾した。そこで、士官は大いに喜んで、自分がカルツームを出發する時、堅い握手を與へたのであつた。
さてこの年の六月、英皇の戴冠式が行はれた。自分もその頃は

使節 政府の命を奉じて他國へ使用するもの。

前約を履む 前の約束を實行する。

恰も好し ちやうど都合よく。

(一)現陸軍少將樋渡盛廣。

(二)第七高等學校。

萬端 いろいろ。萬事。

(拜)

ロンドンに滞在してゐた。六月十日の朝ハイド・パーク・ホテルに將軍を訪うた。これ一つには、日本使節の一行が無事にロンドンに到着されたのを賀する爲であり、また一つには、カルツームに於ける前約を履む爲であつた。恰も好し、將軍の接待係である在英國日本大使館附武官樋渡少佐は、自分が高等學校教授時代にその學校の生徒であつたやうな關係から、この人を通じて、一應レッゲート大尉の意を傳へてもらふことにした。

然るに將軍等の一行に對する萬端の接待は、英國の皇室に於て、かゆい所へ手の届くやうに行はれるのであるから、少しも個人の世話を要することはない。そこで手紙をダブリン聯隊へ出して、餘りに失望しないやうに、レッゲート大尉に申し送つた。事は成立しなかつたけれども、乃木將軍が英國の士官のうちにもこのやうな崇拜者を有してゐられたことが、今更の如くに思ひ

出されるのである。

自分が將軍にハイド・パーク・ホテルで會つた時には、將軍はモ一ニング・コートを着て、外出しようとして居られる時であつた。それにも拘らず早速その部屋に通して、快く談話された。その温厚篤實なこと、少しも旅順の猛將たる面影を認めることができなかった。

春風のそよ吹く如き感じは、たゞ自分ばかりでなく、誰でも同じく與へられたものと見える。自分がバルカン半島を旅行してベルグラードに着いた時、グラランド・ホテルの番頭が、自分を迎へてかういつた、

「あなたは日本人でせう。私はもはや一見して日本人を識別するやうになりました。なぜならば、數日前乃木將軍もこのホテルに宿泊されたからであります。東洋の英雄はどんな烈しい

(Morning Coat)

温厚篤實 ものやはらかなでまめやかなこと。

旅順の猛將

三十七八年の日露戦争の際、旅順攻圍軍の司令官として勇名を馳せたのは、普く人の知るところである。

(1)Balkan. 歐洲の南部。

(2)Belgrade. ニーゴスラビヤの首府。

識別 見わけ。

驚異云々
おどろき不思議に思ひながら裏切られる。反対である。

奇縁
不思議な縁。

餘徳
先人ののこしておいた恩徳。

勃發
にはかにおこる。

土着の人
その土地にすみつてゐる人。

歡待
こんせつなもてなし。

諒解
よく知ること。

人かと、驚異の眼を以て部屋に案内しました。私の想像は全く裏切られました。將軍が温厚篤實な君子人であつたのには、全く意外でありました。この經驗は、私を將軍敬慕者の一人たらしめました。今日またここに日



乃木希典

本の方を案内するのは、奇縁のやうに思はれます。

自分は圖らずも將軍の餘徳を以て、世界大戰の勃發した災源地に於てさへ、土着の人の歡待に接することを得た。

しかし、多くの外國人のうちには、眞に將軍の人となり諒解してゐるものが多いとはいはれなかつた。否、乃木といふ讀方すらもよく心得ない人々もあつた。但し將軍に對する人氣は、たい

(一)海軍大將元帥
東郷平八郎

直覺的に
見ただけ聞いただけで。
共鳴
他人と同様に感ずること。
(二)東京市赤坂區内。

したものであつた。英皇戴冠式の行列の中に、東郷大將と同乗の乃木大將の自動車が現れてくると、「ノガイ、バンザイ」と連呼する公衆もあつた。

自分は或英國の老婦人に將軍のことを説明して、愛子の總べてを戰場に失はれても、御國の御用に立つてくれた」と喜ばれたといふと、その老婦人はこれをうち消して「そんなことは想像せられるべきでない」といつた。馬小屋だけは立派に建てられたことを述べる、老婦人は始めて感服して、なるほど、動物愛護の精神にかなつてゐる。などといつた。

かやうに國民性の異なつた國に行く、乃木將軍の人格を知識階級の人に説明することさへ容易でないが、そこになると、我同胞の間では、どんな無學の人にも、直覺的に共鳴を感ずる。將軍の葬式の日、自分の家族は電車に乗つて青山の葬場へ赴

心事
こころね。

(1) Napoleon Bonaparte.

フランスの皇帝、西暦一七六九年—一八二一年

金よりも更に云々

金以外に人格の必要をいつたのである。

(2) 幣原坦の外遊記、大正十五年富山房發行

いた。車中の人々も、あなたはどこへ。」私は青山へ。と、多くは青山へ行くのであつた。身なりの卑しげな一人の老婆が、小倉の袴を着けた孫の手をひきながら、あなたも青山へか。と人に問はれて、

「はい、さやう。私の一人子息は、旅順で戦死の際に、乃木大將の下で御役をつとめて居りました。その御恩を思ひますれば、なんとして忘れることができません。形見のこの孫をせめて亡き子息の代理として、御葬式に連れて行きます。」

一人子息が殺された時の大將を恨むことか、全くその反對に、忠實な感謝の誠意を捧げつゝある。このやうな純潔な崇拜者を有する乃木將軍の心事⁽¹⁾あゝ、誰か泣かされないものがあらうか。

ナポレオンは必要なものを問はれた時、一に金、二に金、三にも金、といつたとか。これまでの日本には、金よりも更に必要なものがあつたのである。

——世界の變遷を見る——

微妙

微妙な季節の微妙な風物の移り變りに對しても、年と共にだんだん細かな氣持が動いて來て、氣のつかなくつたやうな趣を見出して、一人微笑むやうなことがある。夏には夏の獨得なよさがあるし、冬には冬の、春には春の、それぞれの趣と好ましさがある。るのであるが、取分け私は秋の季節を好ましく思ふ。

獨得

(1) 北海道岩見澤町。
(2) 東京市牛込。
(3) 藤澤町辻堂海岸。

三〇 秋の風物二三

中村武羅夫

一年四季の季節の中で、私は一番秋を好む。夏もいい。冬もいい。春もいい。青年時代には無頓着だつた季節季節の微妙な風物の移り變りに對しても、年と共にだんだん細かな氣持が動いて來て、氣のつかなくつたやうな趣を見出して、一人微笑むやうなことがある。夏には夏の獨得なよさがあるし、冬には冬の、春には春の、それぞれの趣と好ましさがある。るのであるが、取分け私は秋の季節を好ましく思ふ。

私は北海道に生まれて、二十歳過までそこで育つた。上京して十四五年東京で生活して、今では相模の海村に一家を

擧げて移り住んでゐる。相模の國に住むやうになつてから、すでに七年許の月日が経つ。

東京で暮した十四五年の間こそ、まるきり自然に親しむ機會がなくて過したといつていい。僅かに貧しい庭の植木や、草花や、町の燈火の色や、空の色などで、季節季節の移り變りを味はふくらるに過ぎなかつた。が、その前後は可なり自然に親しんだ月日を送つて來てゐる。殊に北海道で生活した二十年の間は、北國の荒い自然の中に包まれて、その地に育つ木や草と同じやうに育つて來たといつても、必ずしも過言ではないと思ふ。

夏の短い北海道では、秋のくることが早い。土用半ばに秋

風が吹くといふ言葉があるが、まだ夏の眞盛だと思つてゐるのに、もう吹く風が秋めいた寂しさを含んで、青々した色はしてゐても、水分の薄くなつたやうな木の葉や草の葉を、かさかさとし忍びやかな音を立てて渡るのである。そして、土用が過ぎて、残暑の暑さが暫く續いたと思ふと、自然はもうすつかり秋である。殊に北海道の山野には落葉樹が多いので、秋の歩みがはつきり感じられる。寒い一夜が明けたと思ふと、雪のやうな眞白な霜が降つて、一夜にして満目の黄葉紅葉である。あゝいふ壯快な秋の來方は、北海道にゐた時分以外味はつたことはない。

どんな小さい一本の木、どんな小さい一莖の草にも、秋に

絶對

は秋の趣が宿るのだからおもしろい。私は町といはず、野といはず、散歩することを餘り好まない。無意味に歩くことなにか殆ど絶對にないといつていいが、秋になると、野道や、田圃路や、海岸などを、犬など連れて、黙々として歩くことがたびある。路傍の枯れ枯れの雑草や芝草に、薄曇の寂しげな日影がしみじみと當つて、地面ではどこで鳴いてゐるのか、そこでも、ここでも、か細い蟲の聲が、しかも絶間もなしに鳴いてゐるのである。人の足音がするとふと鳴き止むが、通り過ぎたと思ふ間もなく、また鳴き始める。ほんたうにも静かな秋の聲を聞くやうな氣がして、可憐な、しみじみした氣がするのである。

敬虔



百舌 (勝田燕琴筆)

田圃路など歩いてゐると、重さうに實のつた稲が深く穂を垂れて、黄金の波を打つてゐる。一年間の百姓の勞苦が、やうやく報いられたのだと思ふと、なんだか重さうに實のつた稲の、満ち溢れたやうな氣持になつてくる。風に吹かれて、手を合はせたいやうな敬虔な氣持になつてくる。風が吹かれて、緑の波を立てる夏の青田も爽かだが、米の實のつた黄金色の秋の田は、一層尊いやうな氣がする。

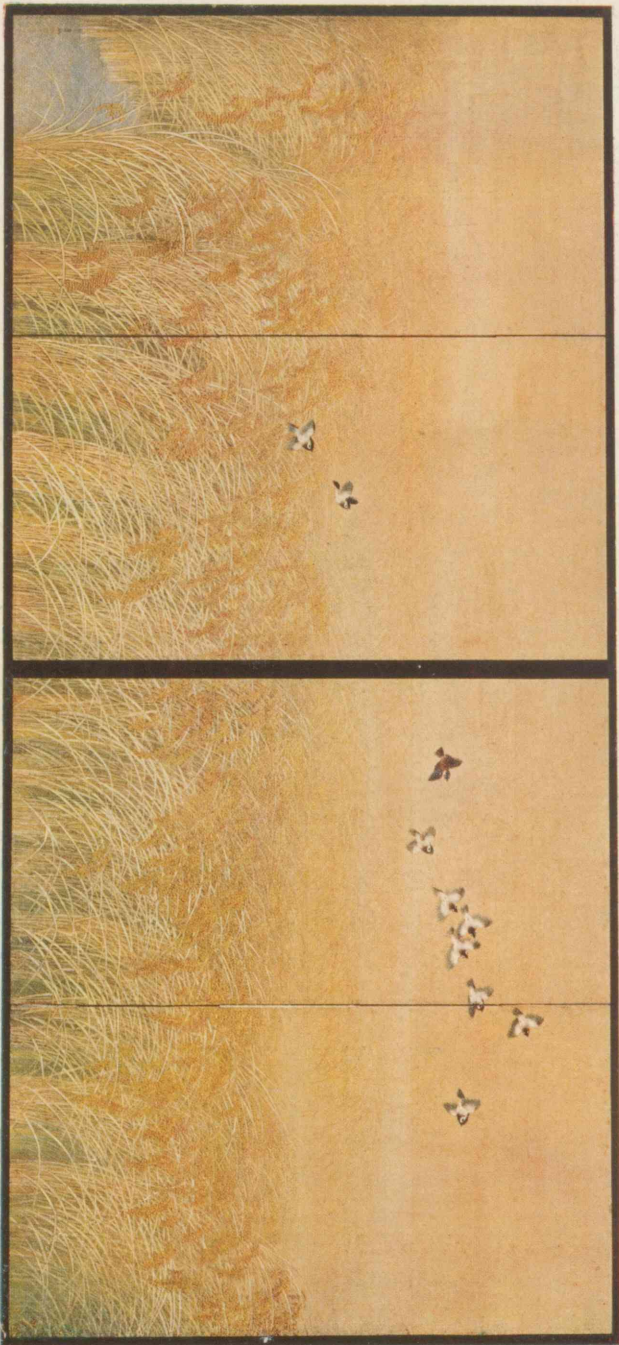
のである。

私は百舌の聲を好む。朝など早く目が覺めて、うそ寒い氣候に、蒲團の餘温ほてから離れかねて、もぞもぞしてゐると、不意に百舌の鋭い鳴聲の聞えることがある。すぐに蒲團を蹴つて、雨戸を繰つて外を見ると、一天鋼鐵の如く晴れわたつて、日はまだ出ないのに、椎の頂邊うねの枯枝か何か、一羽の百舌が止つて、四方を睥睨ひらひらしながら、劈ツツくやうな鋭い聲で鳴いてゐるのである。身も、心も、思はず引緊ひきるやうな氣がする。

海の色が濃くなり、山の色が美しくなるのも秋である。空氣の澄むせい、秋になると、青いものは愈、青く、白いものは愈、白く、赤いものは愈、赤く、間色といはず、原色といはず、すべ

睥睨す

間色
原色



筆 畝 月 木 荒

か た め

ての色が愈、青く見えてくる。私は相模の國に住むやうになつてから、始めて富士山の秀でた美しさ、崇高さを知ることができた。夏や春だと、せつかく秀麗な威容の全貌を見せたと思つてゐても、ちき雲に隠れたりなどして、一日富士の姿を仰ぐやうなことは稀である。秋は幾日も幾日も、富士の全姿を見るやうなことが續く。けふの富士ときふの富士とは違ふ。朝の富士と夕への富士とは違ふ。光線と空氣との關係で、富士は時々刻々にその色彩を變化させ、随つて、或時は嚴かに、或時は優しく、或時は鋭く、或時は穩かである。

秋の富士と秋の海とを眺めるだけでも、私は相模の國に住んでゐる幸福を感じる。

三一 佛の化身

相馬 御風

古刹

私は先頃一つのいい傳説を聞いた。それは越後の北蒲原郡の乙村きのむらにある乙寶寺おつほうじといふ古刹いにしへのしやに參詣した時であつた。その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境内に先年特別保護建造物として指定された、たまたまなくいい形をした三重塔がある。かの傳説はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたものである。

棟梁

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住人小島吉正である。その塔の建築には、さすがに有名なその棟梁も、心を痛めつくしたといはれてゐる。どう工夫して見

ても、うまく行かなかつた。とうとう彼は工事半ばに、絶望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼



乙寶寺三重塔

はたゞ姿を晦ましさへすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜道をたどつて海岸へと出た。そして、海岸に沿うて西へ西へと歩みを運んだ。眞

暗な砂濱に打寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふやうにも思はれた。いつそあの暗い波間に飛びこんでしまはうかといふやうな突きつめた思も、いくたびと

矛盾

なく彼を襲うた。しかし、彼はやはり死ねなかつた。彼はたゞむちやくちやに闇の中を歩くのみであつた。

自分の生命をうちこんで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼にとつては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも彼はなぜかうしてその場を逃出して來たか。それを反省する時、彼は我ながらその卑怯をのろはずにはゐられなかつた。自己に對するのろひは、やがて自己に對する憎みであつた。けれども彼はそのろふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、なほそこに故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦みは、たゞ徒に彼の心を狂はせ亂れさ

黎明

せるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へるものの歩みに外ならなかつた。

彼の心は底知れず暗かつた。しかし、天地の闇はいつとなしにほのぼのとして、黎明の光に照らされはじめた。ほのかに明るみかけた大海の面では、まづ波の穂の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、はてしもなげに續いた廣い砂濱が見えて來た。光は刻一刻と地上の明るさを増して行つた。明離れて行く海には、光を歡ぶが如く波が小躍してゐた。波間に浮いてゐたかもめの胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりとぬれた砂濱に長く長く續いた彼の足跡、むちやくちやに闇の中を歩いて來た彼自らの足跡——それさへも

今は朝の光に照らされて、一條の長い道となつて現れた。さうしたほがらかな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかもすつかり忘れはてて、たゞ茫然とその美に酔うた。そして倒れるやうに、彼は大地の上へ全身を投出したのであつた。

それから幾時過ぎたかわからなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳もと近くに、子供たちの楽しさうな笑聲を聞いた。永い眠から醒めたやうに、彼はふらふらと起上つたと、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻りにやつてゐるのが現れた。なんと、いふわけもなしに、彼はその方へ吸寄せられた。しかし、子供たちは遊に夢中になつ

朦朧

てゐるのか、彼の近寄つたことに少しも氣づかなかつた。が、その刹那、その憐な建築師の疲れはてた両眼には、突如として不可思議な輝が現れた。死んだやうになつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて来て、それを積重ね積重ねして、塔のやうなものを造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心をうちこんでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る代る彼等はそれを續けて、着々として或一つの形を組立てつゝあるが、なかなかうまく行かない。積むと崩れる。崩れるとまた積始める。幾度とな

く失敗し、幾度となく始める。しかも彼等は失望しない。倦まない。やめない。そして、遂に或一つの纏つた形ができ上る。すると、彼等は共に手を拍ち、聲をあげて喜ぶ。そして、更にそれを崩して、また新たに始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何ものかを獲得したやうな確信に輝く面もちを以て叫んだ、

「そこだ。その呼吸だ。その組方だ。」

そして、さう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た道へと駈戻つた――

さうしたことがあつて、漸くのことのでき上つたのが、今

端嚴

Blaise Pascal,
フランスの數
學者、哲學者
(西曆一六六二
年―一六六六
年)

暗示

附會

躊躇

權化

日見るが如き端嚴微妙な姿を持つた乙寶寺の三重塔であるといふのが、傳説のあらましである。しかも、傳説はそれに附加へて、その三人の子供は大日堂の大日、藥師、彌陀の化身であつたといふのである。

「智慧は私たちを子供にかへす。」とバ斯卡ルはいつた。私たちは更に「子供は私たちをほんたうの智慧に導く。」ともいひ得よう。乙寶寺三重塔の傳説は、私にさうした貴い暗示を與へる。子供は佛の化身であつた。といふその傳説の附會をも、私はそのまま、受容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。

(一)支那本部の中
央を東流する
世界第四の大
河。延長約一
千三百里。
おほどかな
(二)江蘇省にある
平野。揚子江
の下流。
蕭條

(三)大正十年。
(四)支那浙江省北
部の開港場。
(五)支那江蘇省の
都會。東洋の
ベニスといは
れる。
(六)江蘇省西部の
都會。蘇州の
西北約五十里。

三二 揚子江の秋(一) その一 南部修太郎

廣くおほどかなその姿。黄泥の水悠々たるその流。自然の
美と詩情豊かな江蘇平野の蕭條たる秋の眺をほしいま、
にしなから、あの揚子江を下つた一日一夜を、私は今もなほ
感慨深く思ひ浮かべる。それは四年前の秋の半ばのことで
あつたが、杭州(四)に靜雅な西湖の勝を探り、水の都蘇州(五)を訪ね
て、城内から遠い城外のいくつかの史蹟を巡り、更に南京を
訪れて、荒廢した舊都の寂しい姿に、人事の悲しいはかなさを
を深く感じさせられた私は、その南京城外の下關(六)から日清
汽船會社の岳陽丸の客となつて、南支那の最後の旅路を上

揚子江の朝



田南岳璋筆

手
た
か
い
主
人

しゆみやう
 香か美しい
 花か美
 川 天下か綺麗
 川 繁か樹
 川 気高
 川 気高

寥落

海へと下つたのであつた。

南京に過したその前日は、寥落の都にもふさはしい時雨
 模様の曇日であつたが、それは一夜の中に名残もなく晴れ
 あがつて、その日は大陸の秋らしく、空は紺青深く澄みわた
 り、稍黄色みを帯びた日の光も、明るく朗かであつた。そして、
 赤煉瓦の建物や工場の煙突の立つてゐる對岸の浦口ウラガハの町、
 振返る南京城外の獅子山や鍾山の眺もくつきりとしてゐ
 て、湖岸の蘆荻が静かな風にさやさやと戦いでゐた。

「けふは珍しいお天気です。下關の宿屋から荷物をさげて、
 私を汽船發着所まで見送つてくれた若い支那人ボーイは、
 達者を日本語でさう私にいつた。」

Boy

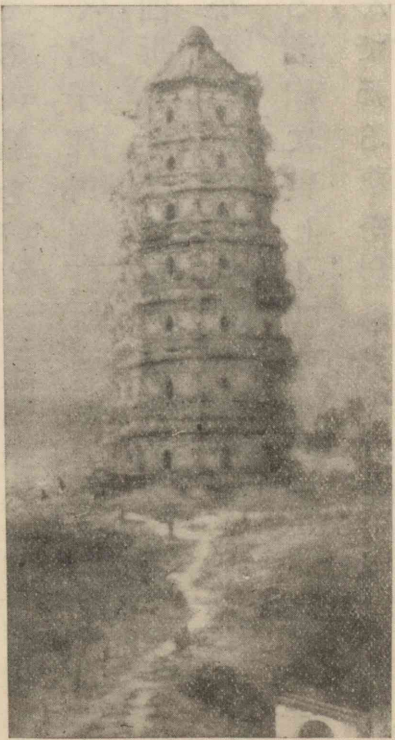
流れてゐるのか、殆どわからないやうな静かな水面を滑るやうにして、岳陽丸が上流の方にその瀟洒な姿を見せたのは、ちやうど正午時分であつた。私は埠頭階上の乗船口からすぐ船に乗りこんで、定め船室に荷物を置いてくると、また上甲板に引返して、手摺によりながら、棧橋の方を眺めてゐた。そこには支那人ばかりの三等船客たちや、荷役を争ふ苦力たちが、卑しく騒がしくひしめき合つてゐる。そのぶざまさに思はず不快な氣持をそゝられた私は、視線をそらして、反對の甲板の方に足向けながら、船の高みからすると、一層廣々と、一層明るく開けて見える江の景色に、うつとりと眺め入つてゐたが、程もなく鈍く尾を引い

た汽笛が鳴響くと、船は緩やかな船足で、いつとなく埠頭を離れてゐた。

川の船路とはいへ、船は白塗の姿麗しい三千餘噸の岳陽丸である。そして、その大船を軽く波上に浮かべて、黄に濁る水靜かに流れ行く揚子江。川幅は時に五六町に廣がり、時に二三町に迫るが、曲折も大きくなだらかに、船はその間を機關の音も微かに、小搖ぎもせずに進み下つて行くのである。さすがに秋である。湖岸に美しく戦ぐ蘆荻も、ところどころうつすりと黄ばんでゐる。草を食む水牛の群。すくすくと群り立つ⁽¹⁾ポプラの木。垂葉の緑深い楊柳の蔭に憩ふ牧童の姿。それ等はいづれも江岸の好ましい眺であるが、岸近く立つ

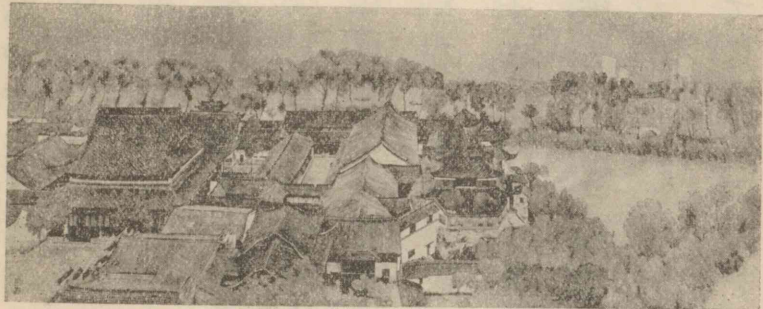
Poplar.

丘陵の頂に時々見える苔むした、朽ち崩れたやうな古塔の姿は、いづれもその昔榮えては、またいつとなく亡びた帝王たちの豪華の夢を物語るものであらう。杭州の雷峰塔、蘇州の北寺の塔や虎丘の塔、上海郊外の龍華寺の塔などと、江蘇平野一帯にそれぞれさういふ傳説を持つ古塔の姿を、いくつとなく見ることができるが、殊に江岸に眺められるそれ等は、今も昔も變りなく流れて行く長江



(筆楊春村中)塔の丘虎

(一)江蘇省の河港。南京から二里。



(筆一信内之山) 寺 山 金

の水に對して、人事のはかなさ寂しさを、感じさせずにはおかない。

三三三 揚子江の秋 その二

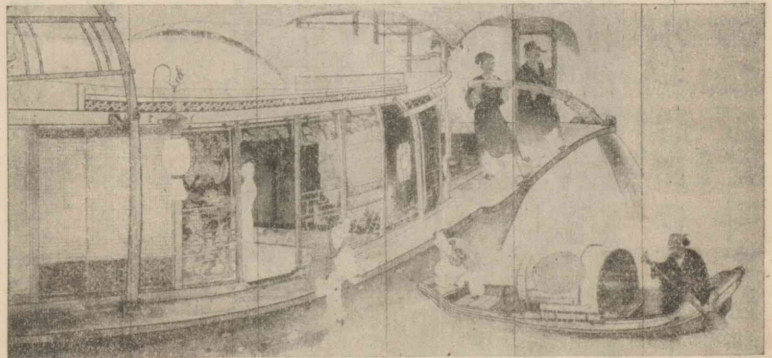
五十哩ほどを四五時間に下つて、船が南岸の鎮江(しんきやう)に投錨したのはもう黄昏の頃で、江を流れる靜かな夕風も、なんとなく肌(はだか)に冷やかだつた。私たち日本人の一等船客四五人づれば、船長の好意で船を下りて、鎮江の町を小一時間ほど散歩して、すつかり日の暮れおちた頃、また船に

(一) 江蘇省丹徒縣金山の上にある。今は江天寺といふ。

(二) 鎮江の東北にある揚子江中に在る。

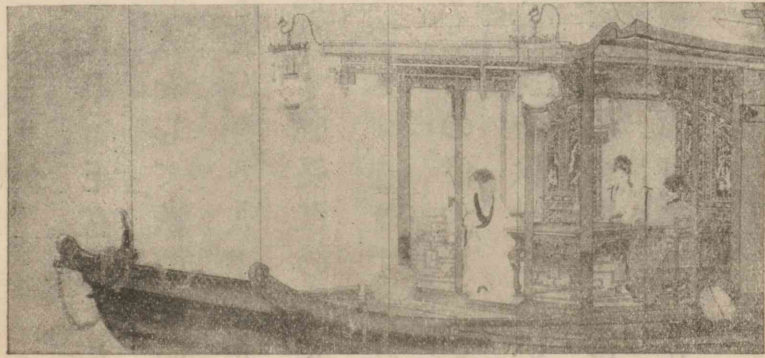
歸つて來た。西の方の空には三日月がかゝり、きらめく星影も美しく、江岸に沿うてぼつぼつと明りのついた鎮江の埠頭は、いかにも水郷らしい、しつとりした眺であつた。

「あれが名高い金山寺で、ずつと向ふの山の頂に見えるのが甘露寺です。船長はうつすりとした夕もやの彼方を指さしながら、さう説明した。船はまたいつとなく埠頭を離れて、^(一)蕉山島の影を左にしなが



一のそ (筆雲大村小) 紡 畫

な波間を滑るやうに進んでゐた。私は甲板の手摺によつて、思はずも異郷の旅人らしい感傷を誘はれながら、一人江岸の夜景に寂しい視線を投げてゐた。颯々たる冷たい夜風、柔かな機關の響、靜かな船の蹴波の音。江の幅は次第に廣くなつて、岸邊の蘆荻も闇の中に吸はれてしまひ、三日月の影もいつとなく遠くの山の端に隠れて、空高き星の光のみひとりさえ、夜は漸く更けて行く。すべ



二のそ (筆雲大村小) 紡 畫

聞耳を立てる
聞かうとして
耳をかたむけ

(Valudo.
(ポルトガル
語)
(天鷲絨)

のある響です。間違ふやうもない草雲雀くさむひはりの聲です。私はじつと聞
耳を立てました。

「すえりひりひりひ。すえりひりひりひ。……」

聲は惜を氣ひもなくそこらに轉がり落ちてゐます。聲の一つ一つ
が、初秋のビロード(一)のやうに厚く滑かな夜の暗闇に滑り落ちて、
そのまゝ、畳みこまれてしまふのが、ありありと聽きわけられる
やうな氣持です。

「もう草雲雀が友を呼ぶ頃になつたのかなあ。」

私は思はず心のなかでさうつぶやきました。吹けば飛びさう
なこの蟲の、小さい灰黄色の身體に目覺めたその生命の悦、欲望、
悲みは、無花果いちじやくの實のもぎ痕きずから流れ出る乳白色の液體のやう
に透徹つたあの歌となつて、絶えず土の上に滴り落ちてゐるの
です。

草雲雀はいつの間にか鳴きやんでゐました。うまく友にめぐ
り會つたのかも知れませんが、私はそれを見ようと思つて、急いで
家に歸つて、小さい提燈を持出して來ました。

根笹
竹の一種。高
さ七八寸で、
葉は両面滑か
である。
かいくれ
まつたく。
思想
おもひ。
涸渴
なくなりかわ
くこと。

私は草雲雀が鳴く時は、いつも笹の葉に止つてゐて、外の蟲の
やうに雑草のなかにはもぐらないものだといふことを聞いて
ゐたので、竹垣のはづれにちよつぱり生えてゐる根笹の方へ、歩
いて行きました。私は提燈のあかりで、そこらを捜して見ました
が、長い口ひげをはやした小さい歌うたひの姿は、かいくれ見出
されません。たつた一人、この頃の照つゞきで、思想も財布も涸渴かち
したらしい蝸牛かたむねが、小さい家に閉籠つたまゝで、笹の葉の裏にぶ
ら下つてゐるのを見つけましたが、私の指がさはると、ころころ
と家ごと地べたに轉がり落ちました。私は氣の毒に思つて、
「なに、心配することはないさ。二三日するとまた雨が降らうと

鳳仙花
鳳仙花科の一年草本。東印度の原産。花は紅、白色。

いふものだ。」
と、口のなかでいつて、慰めてやりました。

「すえりひりひりひ。すえりひりひりひ。……」

だしぬけに聲はうしろから聞えました。私はあわてて、ひよいと聲のした方を振り返りました。そこには鳳仙花が甘い咽せるやうな匂を、ぷんぷんさせて立つてゐました。夕方ばらまいた水は、土を湿らし、葉をぬらして、そこらをじとじとさせてゐました。私は提燈のあかりで、鳳仙花の葉を一枚一枚調べて見ましたが、草雲雀らしいものは、そこらに見つかりませんでした。暗い下葉の蔭で、土塊がむくむく動いてゐるのを、そつとのぞきこむと、隠れてゐたえんまこほろぎの雄が二匹、あわてて飛出しました。

逃げまよつたこほろぎの一匹は、他を跳ねのけるやうにして、鳳仙花の莖に飛びつきました。するとその拍子に、ぴちつと微か

はぜる
さげ開く。

な音がして、鳳仙花の實がはぜました。いくつかの小さい種子は、あたりに跳飛ばされました。

「おい、びつくりするぢやないか、そんな亂暴をして。」

私は口のなかでつぶやきました。えんまこほろぎの雄も、長い口ひげをひねつて、同じやうなことをいつたらしく見えました。ことによつたら、それはどつちも間違で、物蔭に隠れてゐた草雲雀が、さういつたのかも知れません。

私は提燈をさげて、畑の真中に突つ立ちました。不意に脚下にある青紫蘇のなかから、

「りんりん……」

と金属性の低い音が流れ出しました。

「けらだ。けらでもない、捜し出してやらう。」

私はさし足ぬき足して、青紫蘇の側にしやがみました。金属性

(蝶蛙)

聽覺
みい。

〔酢漿草〕

の音は微かな足音をも、その聽覺に感じたらしく、すぐ鳴きやんでしまひました。私は雜草と一緒にたの青紫蘇のなかを、提燈のあかりで捜しました。乾いた地べたに、たつた一つ小さい孔があいてゐて、けららしい頭が、そこからのぞいてゐましたが、私があるを近づけると、あわてて、すぼりと引つこんでしまひました。地べたにへばりついてゐるかたばみの下から、へつぴり蟲が一つはひ出して來ましたが、何かよくせきの用事でもあるらしく、小急ぎにいそいそと、暗い茗荷の植ゑごみの中へ隠れて往きました。すると、すれちがひざまに同じ暗闇のなかから、何か一つ小さいものが、むくむくと動き出して來ました。よく見ると、せむしの恰好をした、土まみれのちいさな蟬の幼蟲でした。

「やあ、ちいさな蟬か。もうぢき九月にならうといふのに、御苦勞さまなことだな。」

十八にも云々
十分熱しきる
いのを形容して
いふ

〔玉蜀黍〕

私は思はずかういひました。十六さゝげの豆の數が、十八にまでもならうといふ頃になつて、このこ土の中からはひ出して來ようといふのは、餘りに遅過ぎはしないでせうか。大抵の蟬は、幼蟲の間を土の中で五六年は過すもので、中でも北アメリカの十七年蟬などは、地下生活を十七年間も送るさうですから、このちいさな蟬も、そんなに長く眠つてゐるうち、つい時候を取違へたのかも知れませんか。

「ほんとに御苦勞さまだな。」

蟬は雜草のなかをかき分けかき分け、そこを突つ切つて、一本のたうもろこしの幹にすがりついたと思ふと、元氣よくぐんぐん上へ上へ攀ぢのぼつて、やがて見えなくなつてしまひました。

「すえりひりひりひ……………」

不意にまた草雲雀の歌が聞えだしました。

私は小猫のやうに身をちぢかめて、聲のする方へそつと提燈を突出しました。すると、

「……すえりひりひ……」

といったばかりで、歌は急に聞えなくなりました。附近はひつそりしました。瓦の下かどこかで、おかめこほろぎの

「りいりい……」

と疲れたやうな聲で鳴くのが聞えます。おかめこほろぎは明るい晝間は、

「すつとんりいりい。すつとんりいりい……」

と曲折のある節で鳴いてゐますが、夜になると、この平凡な歌うたひも、晝間の疲が出ると見えて、たるさうな聲で、

「りいりい……」

と一本調子に鳴いてゐるのが、なんだか氣の毒に思はれます。

曲折 變化
平凡 普通で、少しもすぐれたところのないこと
一本調子 變化のない調子

(酸漿)

行ひ澄ます 佛道の修業をじつとしてゐる。小坊主といつたので、行ひといたつたのである。

暗闇の中でぼんやり赤いものが光つてゐるので、提燈のあたりをさしますと、それはほゞづきの木になつてゐるほゞづきの實でした。

私は提燈を地べたに置いて、ほゞづきの一つを引寄せて、そつとその皮を剥がして見ました。

中には、頭の圓つこい賓頭盧さんのやうな小坊主が、行儀よくつくねんと行ひ澄ましてゐました。

「賓頭盧さん、小坊主さん、何をしていらつしやる。」

私は子供のやうな軽い氣持で、そつと聞いて見ました。小さい賓頭盧さんは、何一つ答へようとはしません。

「すえりひりひりひ。すえりひりひりひ……」

だしぬけにまた草雲雀が鳴きだしました。今度は頭の上のたうもろこしの葉で。

草雲雀は友を尋ねて、尋ねあぐんで、いまだに鳴きつゞけてゐるのです。私は捕へやうもないその影を、二度ともう捕へようと思はなくなりました。

草雲雀はなほ鳴きしきつてゐます。しつとりした夜の大氣に、吾とわが歌聲の銀の滴りに聽酔つてゐるかのやうに。

草雲雀の尋ねてゐる友は、ひよつとすると、この野菜畑には棲んでゐないのかも知れません。求めても、求めても、求め得られなものを求めて、夜どほし蟲は鳴きつゞけてゐるのかも知れないのです。その聲は銀のやうに白く、銀のやうにふるへながら、「すえりひ、りひ、りひ。すえりひ、りひ、りひ。……」

三五 漢土雜話

(一)支那漢の代の人

韓伯瑜^(一)といふ人、父を喪ひて、母と二人して住めり。母は至

(一)支那吳の代の人
(二)その頃支那にあつた一小國の名

りて嚴しき人にて、伯瑜に少しの過あれば、杖もて鞭うつを常とす。伯瑜痛さを忍びて、少しも怨める色なし。或日母例の如く鞭うつに、伯瑜泣くこと頻りなり。母怪しみてその故を問へば、「これまで鞭うたる、毎に痛かりしかど、けふの痛からぬは、母の年老いて力衰へ給へる故なりと思ひ、心弱くなりて泣くなり」といへり。

延陵の季子^(二)といふ人、或時その君の使にて他國へ行く途にて、徐の君を訪へり。徐の君つらつら季子の劔を見て、口にごそ言出でざれ、欲しと思ふ色面に顯れたり。季子心には察しながら、君命を奉じて使する途なればと思ひて與へず。使の事終りて、歸路に立寄りて見れば、徐の君すでに死したり。

直躬 夫の如く
忠孝
あつた

季子大いに悲しみ、かの劔をその墓の傍の樹に結び附けて
歸りぬ。従者怪しみて、徐の君すでに死せり。墓に掛けて誰に
與へ給ふぞ。といへば、我さきに心の中にて與へんと思ひ定
めたれば、その人死したりとも、初の志を變ふべきにあらず。
といへり。

(一)支那の齊の賢
相。齊は今の
山東省に都し
た國

晏嬰あんなといふ人、齊の國の相となれり。その御者馬に鞭うち
て自得せる色あり。御者の妻これを見て夫にいふやう、晏子
は身の長六尺にも満たず、一國の相として、その名天下に隠

誇らしき色
あさまし

れなければ、思慮深ければ、出入にも人に下る様子あり。良
人は身の長八尺、御者となりて誇らしき色あるは、あさまし
からずや。夫大いに耻ぢて、これより大いに慎みしかば、嬰は

(一)支那後漢の代
の人

清貧に安ん
ず

その志を賞して、次第に高官に任用したりといふ。

飽宣あつせんの妻桓氏、字を少君といへり。宣初め少君の父につき
て學びしが、父宣の清貧あつせんに安んじて勉學せるに感じ、遂に少
君をして嫁がしむ。富者のこととて、婚儀の用意善美を極め
たり。宣これを見て妻にいふやう、少君は富貴に生まれて、美
衣美食に慣れたり。我貧しければ、いかにも釣合ひ難し。と妻
答へて、父は君の徳を修め約を守るを重しとして嫁がしむ
るなり。すでに嫁ぎたる身の、いかでか良人の命に背かんや。
と。その日より侍女を返し、美衣を脱ぎ、短き布子を着て、小車
を引きながら、宣と共に郷里あつせんに行きて、宣の母に會へり。これ
より薪水あつせんの業を親らして、婦道を行ふこと固かりしかば、人

薪水の業
婦道

(一)南宋の忠臣
勤王の師

群羊猛虎を
撃つ

身を以て國
に殉ず

風を聞いて
起つ

宗社

人歎稱せざるはなかりき。
文天祥が勤王の師を擧げし時、友ありて止めていへるは、
「今敵兵三道より内地に薄る。君が小兵を以てこれに赴かん
とするは、群羊の猛虎を撃つに似たらずや。」と。天祥答へて、
「國家今日の急に天下の兵を召すに、一人一騎の赴くものなき
こそ口惜しけれ。わが力の足らざるを知らざるにあらず。身
を以て國に殉じ、天下の忠臣義士をして、風を聞いて起たし
めんとするのみ。」と。聞くもの感動せざるはなかりき。軍敗れ
て虜となるに及び、敵、天祥に問ひていはく、「君すでに宗社の
保つべからざるを知りながら、なほ力を盡せしはいかに。」と。
天祥いはく、「父母病あらば、快復の望なくとも、誰か一日も藥

を廢せんや。救はれざりしは天命のみ。」と。遂に刑せられて死
せり。
—高等小學讀本—

三六 花のをとめ

下田惟直

花のをとめ

妙たに清らのあゝ、わが兒よ。
つくづく見ればそゝろあはれ。
かしらや撫でて花の身の。
いつまでもかくは清らなれと、
いつまでもかくは妙たにあれと
いのらまし、花のわがいとしご。

—ハイネ—

(一) Heinrich Heine.
ドイツの詩人。
七年—一八五
六年)

此の文章は
世より大層ノ
好
大正十五年
頃

餘り美しいものを見てみると、人はなんとなく妙なる笛の調でも聽いてゐるかのやうな、胸の血潮の揺れやまぬ哀歡を覺えるものであります。そして、やがてはその哀歡の底から湧上つてくる祈禱に似た心を味はふものであります。ハイネの「花のをとめ」は、私たちが少女といふものに對した時の心持を、そのまま、なんの飾もなしに素直に歌ひ出したもので、「少女」といふものに對する人間の心持の、代表的な作品といふことができませう。

み空のお星さまのやうに清い少女の瞳を見る時、三日月のやうに細い少女の眉を見る時、林檎色の頬、石榴の花瓣に似た唇を見る時、私たちはどうして美しいものの影に潜む

曲線

肉體美

哀さといふやうな哀情を味ははずにゐられませう。

それからまた、さうした美しい形の中に、曲線の裏に、色彩の陰に、少女の澄んだ、この地上のものとも思はれないやうに暖かい情愛が包まれてゐるのだと思ふ時、どうして涙ぐましい感激を覺えずにゐられませう。

更に進んで、少女の美を深く感ずれば感ずるほど、いつまでもかくは清らなれ、いつまでもかくは妙にあれ、と祈らな

いではゐられなくなつてくるのであります。ハイネの歌つてゐます通り、少女は全く地上に咲く生きた花だと思ふのであります。

若しも人間のうちに、少女といふものがなかつたならば、

29、20
26/9
娘、伐り荒しり

この社會はいかに濁り、いかに殺伐に亂れて行くことであ
りませう。

歴史のページを繰つて見ますのに、そこには英雄のみの
讚美された時代が、随分永く續いて来て居ります。

また男性のみの謳歌された時代が、可なり久しく續いて
来て居ります。

女子を定めて我々

さうして、英雄や男性の謳歌された結果、そこには戦のみ
が繰返されて、多くの精靈が血にまみれてさ迷つてゐるの
であります。私たちは、さうしたのものには、もうあきあきい
たしました。

この地上に聖い平和な少女の時代が、もうそろそろ生ま

謳歌す

れ出でて、もいい頃ではありますまいか。

「願はくは生きた花よ、益、美しく咲出でよ。」

私はハイネの花のをとめを口ずさみながら、いつも美し
い少女の幻を心にゑがいて、さう祈らないではゐられない
のであります。

三七 鳥類の生活

松本亦太郎

瑞相

South
Kensington,
ロンドン市ハ
イド・パーク
の南にある。

梅が枝に飛ぶ黄鳥や、池の面に眠る鴨の姿はいかにも閑
雅で、泰平の瑞相として人に愛でられてゐるが、鳥の無邪氣
で愛らしい有様は、その家族生活に於て最もよく顯れるの
である。サウス・ケンシントンの博物館には、殆どあらゆる鳥

蒐集
剝製

表情

真に迫る

の巢が蒐集されてあつて、一々の巢の周圍に剝製の鳥を配置し、親鳥がその雛や卵を愛育保護する天然ありのままの状態を直寫してゐるが、鳥の表情といひ、周圍の風色といひ、いかにも真に迫つて居つて、これを見るものは、禽鳥の一家親子の情が、いかに楽しく、いかに平和なものであるかを、想像し感歎せざるを得ないのである。いかなる不慈な親も、いかなる不孝な子も、ケンシントン博物館蒐集の鳥の巢を見たらば、必ずその本心に立返るであらうと思はれるほどである。一方より観る時は、禽鳥の生活ほど喜樂平和な有様を呈するものはない。

しかし、鳥類が右の如き喜樂平和な状態中に棲息するの

本心の真

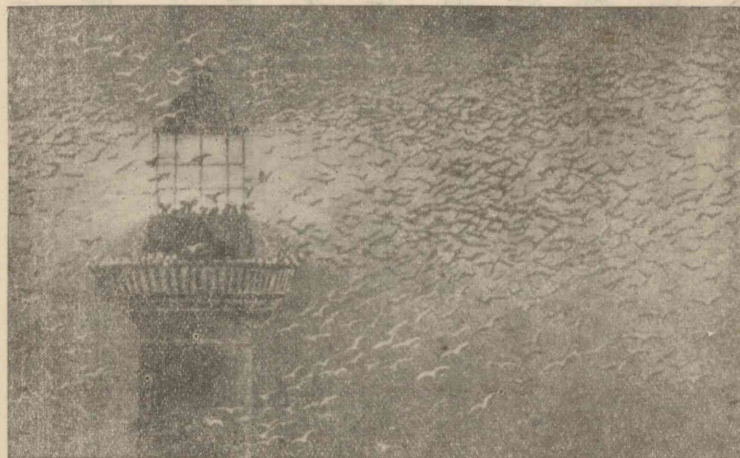
奮闘

去來現象

は、その生涯の或短時期に過ぎないので、他の方面から觀れば、鳥類の生涯は、實に一大奮闘の生涯であると認めねばならぬ。しかも鳥類の如く勇ましい奮闘をするものは、動物中に於て、恐らくその比類がないといつてもよいからである。鳥は自己の生存及び種族蕃殖の爲に、他の鳥と相争ひ、或は鳥以外の諸動物と激烈に相戦ふ必要があるのであるが、鳥類の奮闘の最も雄大な状態は、殆ど不可抗の天然力に抵抗し、その意志を貫かうと努力する時に於て顯れる。かかる場合に於ける奮闘は、實に莊嚴なものである。天然力に抵抗して禽鳥が大奮闘をなす適例は、これをその去來現象について見る事ができる。この去來現象は、日

(鳴、鵝)

(Newfound-land.)
北米カナダの
東部にある大
島。英領。



鳥渡たつ集に臺燈ドンラゴリへ

本あたりでは、春と秋とに最も著しくこれを見るので、北方から南方へ向かふものと、南方から北方へ向かふものがある。即ち自己の生まれた郷土に向かつて歸りくるものと、自己の郷土から去つて、遠い遠い所へ飛行くものがある。
禽鳥去來の距離について、西洋の學者は種々研究を試みてゐる。黄金しぎはニユーフォン

(Greenland.)

北米の東北北
氷洋中にある
大島。デンマ
ーク領。

(南アフリカの
略。

雙翼

(Baltic Sea.)
ヨーロッパ北
部の入海。

ドランド附近に生まれ、中央アメリカの諸島邊まで移住するのであるが、その距離は千七百哩に達してゐる。俗に石返といふしぎの郷土はグリーンランド附近で、これが冬になると、濠洲或は南米に棲むのであるから、その旅程は約七千哩に達するのである。この他南阿及び濠洲にゐる鳥で、春になると北氷洋に移るのがある。即ちその移住旅程は九千哩以上である。地球の直径は八千哩弱である。小さい雙翼の力を頼みに、八九千哩を飛躍する鳥の勇氣と努力とは、人間の想像し得るところでない。
禽鳥去來の道筋は、最短距離の徑路を取るのではなくして、多くは至つて迂廻してゐる。例へば、バルチック海濱に棲息

① Alps.
中部ヨーロッパの大山脈。
② Rhine.
ドイツの河。
③ Main.
ドイツの河。

する鶴は、アフリカに去來するのであるが、最短距離からいへば、アルプス山を越え、イタリアの東海岸を経てアフリカに入るべきであるのに、實際はさうでなくして、ライン河に沿うてその源まで溯り、それよりメイン河に随つて海岸に出で、イタリア及びシシリーの西岸をよぎつて、アフリカに入るのである。この徑路は年々殆ど不變である。旅行には休息の場所や、食餌を得る場所が必要であるのみならず、氣候の關係もあるから、やたら道の道を取るといふわけには行かぬ。若し誤つて去來の公道を迷ひ外す時は、種々な障害に遭つて、遂にその目的地に達することができずして死ぬのである。故に正當な去來の道筋を知るといふことが、鳥類に取

死活の問題

つては、死活の問題になるのである。

然るに移住發程の季節に於ては、幼鳥が一種の旅行熱にうかされて、親鳥の出發を待つことができず、無經驗をも顧ずして、無鐵砲に飛出し、正當な道筋がわからず、途中に迷うて死ぬこともあるのである。かゝる次第であるから、概して群をなして去來するといふことが、禽鳥の爲に極めて必要なのであつて、幼い鳥は老いた鳥から去來の公道に當る原野や、山脉や、谿谷や、河流などの形勢を學びながら、飛行かねばならぬのである。

禽鳥の飛行の速力は随分大きなものである。一二の例を舉げて見ると、うづらが海を渡つて去來する際には、一時間

(鶉)

三十八哩ぐらゐな速力で飛んで行くのである。東京から大阪までは、最急行列車で十一時間を要するのであるが、うづらはこれを九時間で飛んでしまふ割合である。鳩は四十三哩以上の速力で、随分遠距離を飛ぶのであるから、東京大阪間の汽車道ならば、八時間ぐらゐで通過してしまふ割合である。競馬の記録に遺つてゐる最も迅速な馬は、三哩競走に一秒十五・六ヤード(一)の速力を以て走つてゐるが、燕は一秒に四十九・〇ヤードの速力で飛ぶのみならず、競馬は、長い間練習させても、以上のやうな速力を保つて走るのは、僅か六分か七分に過ぎないが、或鳥類は數日間毫も翼を休めることなしに、大速力で飛ぶことがある。

— 渡り鳥日記 —

(Yard)
の長さの單位
一ヤードは三
尺一分七厘

三八 本居翁の遺蹟 その一

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く楽しさ。早稲田はすでに刈盡したが、晩稲田は金色に波立つて、豊年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生ぐらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐる疎な小松原の道を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、お墓はあそこの山の茂みの所です。と車夫の語るのを聞きながら、いつしか山室(一)に着いた。車を捨てて、爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都

喬松

(一)三重縣飯南郡
山花岡村にある
爪先上り

に慣れた目や耳には清らかに珍しい。杉、松、椎などで小暗い路を稍四五町も上つた所に、浄土宗の寺がある。妙樂寺とい

つて、翁には深

本い關係のある

居寺である、それ

宜から右へ左へ

長と九十九折を

喘ぎ喘ぎ六七



町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三
十坪ぐらゐるが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が
即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本。本居宣長之奥墓と題

(一) 秋田の人。
長の弟子。
保十四年。
五〇三年。
年六十八。
段。

した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の
墓の左手に圓い石があつて、平田篤胤(一)大人の、
なきからはいづくの土になりぬとも
魂はおきなのもとに行かなん
と刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたこ
とはない。しかも數多の門弟子の中で、ひとり翁の傍に侍つ
て居られるのは、さぞかし満足なことであらうと思ふ。この
墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生
前に占定めして置かれたのである。その承諾を喜んで、住僧に
宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏してゐる。

占定す

かすまふ

卓絶

永劫

やま室の山に千年のやどしめて

風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

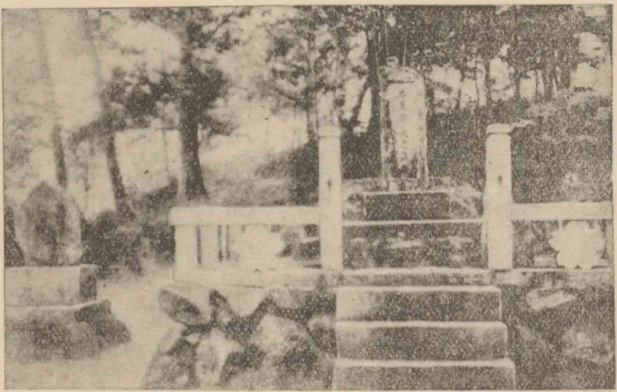
も、とせの世は隔つれど教へ子に

かすまへませとをがみ額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

見はるかす

(一)飯南郡



この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がな

い。青々とした伊勢の海を見はるか

して、志摩、三河、尾張等の崎々、山々、近

くは松坂町を眼下に見る。富士の山

もいつもはちやうどあのあたりに

見える。とホテルの主人は指さした。

千古に卓越した偉大な學者の奥城

としては、誠にふさはしい場所であ

る。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅

を拜し、參拜名簿に記入などする。ここの眺望も誠に美しい。

元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをりをりここに遊ばれたのである。

三九 本居翁の遺蹟 その二

松坂へ歸つて城址の公園に行く。ここに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存されてゐる。また新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛のもの、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中で火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。しかし、庭の

(一) 鈴屋は翁の號。

遺愛のもの

稿本

舊態

(一) 今の戸主、翁五世の孫。

(竈)

(一) Weimar.
ドイツの一都會。
(二) Johann
von Goethe.
ドイツの詩人。
(三) Johann
Christoph
Friedrich
von Schiller.
ゲーテと並び稱せられるドイツの詩人。
(四) 西曆一七〇五年—一八〇五年

樹木置石まで、一切舊態を存するやう苦心したといふことで、本居清造といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所も、舊のまゝの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい階子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段につながれて懸つてゐる。(一)これは模造品で、本品は陳列庫に在る。(二)これが即ち翁が一切の著書の述作された場所である。この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から差しこむ夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家居のさまが、愈、翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマールで、ゲ―テやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な

事業と、その質朴な家居の状態の對比をおもしろく感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲーテ、シルレルの舊宅を見た時は、日本にもかういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、まづこれを翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悦ばしいことである。

この公園は四望豁然、パノラマを見るやうで絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。わが國に翁あるは、わが國の誇。松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越したものはない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が神宮風の様式であるのは、一入うれしく感じた。

豁然
Panorama

返咲

小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲をしてゐる。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も、返咲を見られて、さすがに本居翁の郷土故、櫻は一年中咲くのだらう。といはれたといふことである。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ

風知られぬ花にはありける

○字のまねり

改訂女子新國文 卷三 終

一
奉
送
正
本
一
冊
以
答
諸
君
之
厚
愛
也
芳
賀
矢
一

浦野

大正十二年十二月十五日 訂正再版發行
 大正十五年九月二十八日 訂正三版發行
 昭和元年十二月二十五日 訂正四版印刷
 昭和元年十二月二十七日 訂正四版發行

編者 芳賀矢一
 發行者 合資富山房
 代表者 坂本嘉治馬
 印刷所 富山房印刷部

自一卷至 五卷八	自一卷至 四卷	昭和三年 臨時定價	自一卷至 四卷	自一卷至 五卷八	定價
			各金四拾貳錢	各金四拾錢	
			各金七拾錢	各金六拾六錢	



有所權著作

發行所

合資富山房

東京市神田區通神保町九番地

電話神田二四・二四・二四三番
振替口座東京五〇一番



二〇一〇年
大下知恵子

組

二〇一〇年
大下知恵子

Handwritten notes and a diagram on the right page of the notebook. The diagram features a central vertical line with several circles and a diamond shape attached to it, possibly representing a botanical specimen or a specific measurement. There are also some faint, illegible markings and text scattered around the diagram.



二
大下知恵子